
なら学研究報告

13

Journal of NARA Studies

2025.3

2025年3月14日発行

編集・発行 なら学研究会

〒630-8506 奈良市北魚屋西町

奈良女子大学文学部 磯部敦研究室内

mail to a24isobebosi@outlook.com

【資料紹介】

『大阪民俗談話会記録 第一集稿本』内容細目

—— 昭和 9 年～昭和 14 年における大阪民俗談話会の活動記録

磯部敦¹・岡本真生²

目次

はじめに	7
宮本常一と『大阪民俗談話会記録』	9
小谷方明・太田陸郎と「出席者芳名」	16
凡例	18
目次細目	19
談話会記録 第 1 回～第 5 回	19
第 1 回民俗談話会（1934/昭和 9 年 11 月 11 日）	19
第 2 回民俗談話会（1934/昭和 9 年 12 月 16 日）	19
第 3 回民俗談話会（1935/昭和 10 年 1 月 27 日）	20
第 4 回民俗談話会（1935/昭和 10 年 2 月 24 日）	20
第 5 回民俗談話会（1935/昭和 10 年 3 月 31 日）	21
民俗談話会記録 第 6 回	21
第 6 回民俗談話会記録（1935/昭和 10 年 4 月 14 日）	22
民俗談話会記録 第 7 回～第 9 回	22
第 7 回民俗談話会（1935/昭和 10.5.26）	22
第 8 回民俗談話会（1935/昭和 10.6.16）	23
第 9 回民俗談話会（1935/昭和 10.7.14）	24
民俗談話会記録 第 10 回～第 17 回	24
第 10 回民俗談話会（1935/昭和 10.9.15）	24
第 11 回民俗談話会（1935/昭和 10.10.13）	25

1 磯部敦（いそべ・あつし）奈良女子大学研究院人文科学系・教授

2 岡本真生（おかもと・まい）四條畷市教育委員会社会教育部文化財課・主幹

柳田先生還暦記念講演会	25
第 12 回民俗談話会 (1935/昭和 10.11.2)	26
第 13 回民俗談話会 (1935/昭和 10.12.8)	26
第 14 回民俗談話会 (1936/昭和 11.1.12)	27
第 15 回民俗談話会 (1936/昭和 11.1.18)	27
第 16 回民俗談話会 (不明)	28
第 17 回民俗談話会 (1936/昭和 11.3.7)	28
民俗談話会記録 第 18 回～第 20 回	28
第 18 回民俗談話会 (1936/昭和 11.4.12)	29
第 19 回民俗談話会 (1936/昭和 11.4.16)	29
第 20 回民俗談話会 (1936/昭和 11.5.10)	30
談話会記録 第 21 回～第 25 回	30
第 21 回民俗談話会 (1936/昭和 11.6.14)	31
第 22 回民俗談話会 (1936/昭和 11.7.12)	31
民俗学講習会委員会席上にて	32
第 23 回 例会 (1936/昭和 11.8.30)	32
第 24 回 民俗談話会 断片 (1936/昭和 11.9.19)	32
第 25 回民俗談話会 (1936/昭和 11.11.28)	33
第 26 回民俗談話会 (1937/昭和 12.5.30)	33
第 27 回民俗談話会 (1937/昭和 12.6.27)	34
民俗談話会記録 第 28 回～第 29 回	35
第 28 回民俗談話会 (1937/昭和 12.7.25)	35
第 29 回民俗談話会 (1937/昭和 12.9.19)	35
第 30 回民俗談話会 (1937/昭和 12.10.24)	36
第 31 回民俗談話会 (1937/昭和 12.11.28)	36
第 32 回民俗談話会	37
民俗談話会記録 第 33 回～第 35 回	37
第 33 回民俗談話会 (1938/昭和 13.2.27)	38
第 34 回民俗談話会 (1938/昭和 13.3.13)	39
第 35 回民俗談話会 (1938/昭和 13.4.17)	39
出席者芳名	39
(民俗談話会だより) 1938/昭和 13 年 2 月	43

2 月例会案内.....	43
1 月例会概報.....	44
学界の近況	44
民俗談話会だより 1938/昭和 13 年 3 月	44
3 月例会案内.....	44
質問一束	45
前回例会概報.....	45
学界消息・書物紹介	45
回顧私感.....	46
民俗談話会だより 1938/昭和 13 年 4 月	47
4 月例会案内.....	47
質問一束	47
3 月例会概報.....	47
木地屋関係資料	47
消息二、三	48
新刊紹介	48
民俗談話会だより 1938/昭和 13 年 5 月	49
5 月例会案内.....	49
4 月例会概報.....	49
学界消息その他	50
新刊二、三	50
民俗談話会だより 1938/昭和 13 年 6 月	50
6 月例会案内.....	50
5 月例会概報.....	51
学界消息その他	51
新刊紹介	51
雑誌の記事（地方のもの）	51
玉岡松一郎氏出征	51
民俗談話会だより 1938/昭和 13 年 8 月	52
8 月例会案内.....	52
7 月例会概報.....	52
会員消息その他	52

新刊紹介その他	52
民俗談話会だより 1938/昭和 13 年 9 月	54
9 月例会案内.....	54
8 月例会概報.....	54
会員消息その他	54
新刊紹介その他	54
民俗談話会だより 1938/昭和 13 年 10 月	55
10 月例会（第 41 回）案内	55
9 月例会概報.....	56
民俗学講習会	56
学会その他の消息	56
新刊紹介	56
民俗談話会だより 1938/昭和 13 年 11 月	57
11 月例会（第 42 回）案内	57
10 月例会概報.....	58
会雑件	58
民俗談話会だより 1938/昭和 13 年 12 月	58
12 月例会（第 43 回）案内	58
11 月例会概報.....	58
会消息	59
出口米吉先生論文索引	59
新刊紹介	59
民俗談話会だより 1939/昭和 14 年 1 月	61
昭和 14 年 1 月例会（第 44 回）案内	61
12 月例会概報.....	61
会消息	61
民俗談話会だより 1939/昭和 14 年 2 月	63
昭和 14 年 2 月例会（第 45 回）案内	63
1 月例会概報.....	63
山川氏古鏡見学会	63
会消息その他	64
新刊紹介	64

民俗談話会だより 1939/昭和 14 年 3 月	65
昭和 14 年 3 月例会（第 46 回）案内	65
2 月例会概報.....	65
会消息その他	65
新刊紹介	66
大阪民俗談話会報 1939/昭和 14 年 5 月	66
昭和 14 年 5 月例会（第 48 回）案内	66
3 月例会概報.....	66
4 月例会概報.....	67
会消息その他	67
新刊紹介	68
橿原神宮聖域拡張工事発掘遺跡についての講演要領（日色四郎）	68
廣大寺池の灌漑（松村捨次郎）	68
大阪民俗談話会報 1939/昭和 14 年 7 月	69
昭和 14 年 7 月例会（第 49 回）案内	69
5 月例会概報.....	69
沢田先生応召送別会	70
奈良民俗学講演会	70
会消息その他	71
新刊書目	71
大阪民俗談話会報 1939/昭和 14 年 9 月	72
昭和 14 年 9 月例会（第 50 回）案内	72
7 月例会概報.....	73
会消息その他	73
柳田先生	73
新刊書目	73
大阪民俗談話会報 1939/昭和 14 年 12 月	76
第 53 回例会案内	76
9 月例会概報.....	76
10 月例会概報.....	77
宮本常一送別会（戎橋天琴楼）	77
11 月例会概報.....	78

消息一、二	78
「民間伝承の会」大阪支部会報（二） 1936/昭和 11 年 6 月	78
見返し	78
刊記	79
第 21 回例会報告	79
第二回民俗学講習会	79
会員消息	79
読書往来	80
第 22 回大阪民俗談話会通知	80
御願ひ	80
本部へ希望	80
地方の研究団体への希望	80
編輯子のことば	80
「民間伝承の会」大阪支部会報（三） 1936/昭和 11 年 8 月	81
見返し	81
刊記	81
第 22 回例会報告	81
会員動静	82
大阪支部会員芳名録（民間伝承の会入会者）八月二十日現在	82
大阪に於ける民俗学講習会	82
ことわり	83
書籍紹介	83
本部の動静	83
第二回民俗学講習会	83
新刊紹介	83
新参加紹介（9）	83
あとがき	84
絶版書報告	84

はじめに

奈良女子大学学術情報センター所蔵『大阪民俗談話会記録 第一集稿本』を紹介する。

- 縦 24.2 cm、横 17.0 cm。半紙二つ折り。謄写版。談話会記録の版下筆耕は宮本常一。
- 表紙右肩に「自昭和九年十一月十一日／至昭和十三年四月十七日」、中央に「大阪民俗談話会記録 第一集稿本」。
- 見返しに「はしがき」、「大阪民俗談話会目次」(4 ページ)、「事の起」(2 ページ) に続いて談話会記録等を綴じる。
 1. 『大阪民俗談話会記録』(1934/昭和 9.11.11～1938/昭和 13.4.17)
 2. 『民俗談話会二月例会だより』(1938/昭和 13.2)
 3. 『民俗談話会だより』(1938/昭和 13.3～1939/昭和 14.3)
 4. 『大阪民俗談話会報』(1939/昭和 14.5～1939/昭和 14.12)
 5. 『「民間伝承の会」大阪支部会報』2 号(1936/昭和 11.6)
 6. 『「民間伝承の会」大阪支部会報』3 号(1936/昭和 11.8)を藁紐とホチキスで合綴。いずれも謄写版。末尾合綴『「民間伝承の会」大阪支部会報』の発行人は横井照秀で、筆耕も同人と思われる。

近畿民俗学会ホームページによれば、大阪民俗談話会は「小谷方明氏が主催者となり、1934 年 11 月 11 日に大阪府堺市の浜寺公園の海の家で開催された」集まりに始まるという³。その当事者のひとりである宮本常一は、談話会結成までを次のように述べる。

昭和九年の秋、柳田先生が京都大学の秋の講義においでになられた。そのおり、京都の宿へたずねていろいろお話を承り、大阪に岩倉市郎氏や桜田勝徳氏のおられることを知った。そして先生の御言葉によって、小谷方明氏にはかって、同氏たちも招いて、堺市浜寺の海の家で談話会を開くことにした。

3 近畿民俗学会ホームページ (<https://sites.google.com/view/kinkiminzoku/>) 参照。その後、近畿民俗刊行会を経て 1936/昭和 11 年 5 月に近畿民俗学会が改称成立するが、大赤民俗談話会の例会は継続実施されている。

自昭和九年十一月十一日
至昭和十三年四月十七日

大阪民俗談話會記錄

第一集稿本

この会には澤田四郎作博士も来てくださった。沢田博士は、大阪の玉出に医院を開業しておられたが、この会合以来、大阪の民俗学のために、よき先達としてお世話くださることになった。そして大阪民俗談話会が生れたのである。⁴

宮本の述懐に出てくる桜田勝徳もまた、談話会誕生前夜のことを次のように回想する。

しかしながら今日に至っては、この昭和九年の秋に柳田先生が来阪されて私たちを引き合わせて下さるまでは、沢田・岩倉・宮本・桜田らは大阪にありながら互に相知ることなく過していたということに非常な驚きをおぼえる。何故かというにこの民俗談話会に相寄った私たちはたちまち百年の知己ともいふべき間柄になり、殊に私は上記の三氏には非常な親しみを以て深く接してまいったので、昭和九年の秋以前には互に知るところがなかったということが誠に奇妙に感ぜられるからである。⁵

佐藤健二「近代日本民俗学史のために」(『柳田国男の歴史社会学』第6章)は、「『大阪民俗談話会』活動開始の直接のきっかけも、じつはひとつではないと考えておいたほうがよい」⁶として、談話会結成のおもわくや結成以前の活動などに目を向けているが、柳田国男という大きな結び目に紐付いていた者たちがつながり結び目となったところに談話会活動があったことは、『大阪民俗談話会記録』(以下、『談話会記録』)の資料的特徴にかかわって指摘しておきたい。『談話会記録』もまた、そうしたつながりをもたらす媒体であったからだ。

この談話会については、『宮本常一日記 青春篇』(毎日新聞社、2012)に『大阪民俗談話会記録 第一集稿本』に基づいて第1回(1934/昭和9.11.11)から第35回

4 宮本常一「あるいて来た道」より「大阪民俗談話会」。引用は、宮本常一著作集第1巻『民俗学への道』(未来社、1968) p.172。

5 桜田勝徳「大阪民俗談話会が生まれた頃」、『近畿民俗』31・32合併号(近畿民俗学会、1962.11) p.37。

6 佐藤健二『柳田国男の歴史社会学 続・読書空間の近代』(せりか書房、2015) p.347。初出は『研究報告』165号(国立歴史民俗博物館、2011.3)掲載「近代日本民俗学史の構築について／覚書」。

(1938/昭和 13.4.17) までの開催年月、出席者、談話内容が列記紹介されており、各会の具体的な内容を把握しうる。同書には「第一回大阪民俗談話会の「談話記録」」も翻刻されており、発言者と発言内容を見ることが出来る⁷。

佐藤健二前掲書は、「日本民俗学」の展開を見わたすマクロな民俗学史と、視野を「郷土」に限ったミクロな民俗学史とをつなぐ、「場」の把握と分析とが不可欠⁸であるとし、「そうした場の把握と分析を始めるための実験的な基礎作業」として、第1回から第147回(1954/昭和29.2.11)までの参加者数、場所、内容を表にまとめている⁸。佐藤論では『旅と伝説』『五倍子雑筆』『民間伝承』等に掲載された消息記事を典拠としているが、表書式の関係もあってか、各会参加者は人数のみの提示となっている。

大阪民俗談話会についてはこの二文献、およびその典拠文献が備わっているが、奈良女子大学学術情報センター所蔵資料が『宮本常一日記』未載資料も合綴していることから、ここにあらためて紹介することとした。紹介にあたり、目次細目と各会出席者の明示をとおして動向等を把握できるようにした。

(磯部)

宮本常一と『大阪民俗談話会記録』

『大阪民俗談話会記録』は文字どおり「談話」の「記録」であるが、たとえば1935/昭和10年3月31日開催の第5回談話会記録から一例を挙げてみれば、次のごとくである。

桜田 ワタクシするといふ用語例は九州あたりにもある。

沢田 大和では下男などの休むのをワタクシするといふ。

7 このほか、第一集稿本冒頭の「事の起」も全文掲載されている。

8 注6 佐藤前掲書、p.345。付表「大阪民俗談話会の記録」は佐藤健二「大阪民俗談話会を考える」(『柳田国男論集』6号、柳田国男の会、2008.8)の再掲であるが、「大阪民俗談話会を考える」では、「若者宿のような「場」として澤田家が存在」し、澤田四郎作の「奥さんである澤田國枝が談話会の維持持続に、いかに大きな役割を果たしたか」について指摘している(引用は、佐藤健二『柳田国男の歴史社会学』、p.349)。

桜田 喜界島では分け前をもワタクシするといふ。⁹

発言者と発言内容が明示されているが、会のように発言者を彷彿とさせるような再現性はない。ここで可視化されているのは、発言者と結びつけた発言内容のエッセンスである。こうしたスタイルは当初から考えられていたようで、1934/昭和9年11月11日開催の第1回民俗談話会「大阪民俗談話会の記録」(『旅と伝説』8年1号、1935.1)からすでに上記のようなスタイルを採用しているのである。そして、各回の談話記録を支えていたのが宮本のメモであった¹⁰。「大阪民俗談話会の記録」末尾の後記で、宮本は次のように記している。

心覚えに書いておいたのだが、この次からもつと細かに書いて見よう。事実
は之どころでなく、桜田氏の旅の話、岩倉氏の喜界島の話、澤田博士の性習
俗など、聞き逃した話が十中九まであつた。或は右の中に少々誤謬がある
かと思ふがそれは私の責任である。¹¹

おなじことは、『談話会記録』冒頭の「はしがき」二条にも記されている。

此の集録は全く筆者の心覚に書いたもので、方法論、その他理論的なものは一切書きませんでした。従つて本集は「どこにどんなものがあるか」といふことを知る程度のものです。

ところで、自身の「心覚に書いたもの」を「談話記録」として公開する意義はどこにあるだろうかと考えてみたとき、参加すること能わなかった人びととの情報共有や談話会のアーカイブといった理由が思いつくが、とりわけ前者などは、会の実施と記録の公開のあいだの短さが前提になっているように思う。先ほどの第5回談話会記録末尾の後記で宮本が、「古い記録なのと、筆記が不完全なので

9 第5回民俗談話会における杉浦瓢「米搗き部屋」報告後の、桜田勝徳と沢田四郎作の発言。『談話会記録』(1938.3) p.16。

10 宮本のメモは現存していないようだが、桜田勝徳による第一回談話会「浜寺の民俗談話会メモ」については、小川博編・解説「桜田勝徳の未完ノートより② 桜田勝徳と大阪民俗談話会」(『歴史手帖』12巻10号/通巻132号、名著出版、1984.10)で翻刻紹介がなされている。宮本のメモにもとづく「大阪民俗談話会の記録」(『旅と伝説』8年1号、1935.1)との違いが興味深い。

11 前掲注4、p.53。

一此の歌謡集は、才一四からは才三十五回までのものとめられたもので、才一四から四回までは放と傳記に登場したもので本集には省かれました。才七回、才十六回は、筆者が完了した。完結なく、第十四回は近畿民俗への、才三十六回は原稿と近畿民俗に近づくものであるが、何れも省かれました。

二、此の集録は全く筆者の意に書かれたもので、方法論、その他理論的なものは一切書きませんでした。従つて本書は「どこにどんなものがあるか」といふことを知る程度のもので、

三、説書の誤謬を訂正して、行きたいと思いますが、資料としての使用の際、傍不審の字、
ル、まゝおぼせられませう。巻末に署名録を附け加へました。

四　　之は「一書多く話しなす方」の故事者のものが多くふません。之は「記録」とりやう／＼なかつたため何をしてなしたかの記憶も明確でない爲です。又進行のための發言も省きました。

五、第三十六回以後は改めてまゝとめます。

六、お牛もとに行つてゐるものを会の順に整理してまゐて下さいませ。

大港民俗談話會目次

三
の
起

一 回

卷二

海嶺に放ける焚火、
左義長、相撲山車、碓氷

魚の糸を引く

卷三

卷五

七
五
四

泉州に於ける 肥州出稼人(小谷)、お多買さん
産の制度、米つき部屋(杉浦)、ワタウエ

手紙の民俗、新考者、ちい
割裁

奉公人令家

为六回

和歌の源母子(小谷) 徳川時代の歌集(歌)
まきとみ(鳥の林) 河内母との相見(歌)

(海方)

相互扶助(互助) 義々 義々 義々

貧困者の救済と食
子供の週五補助

卷八

食糧島の娘宿（横井）
ほめられさる書きたる

制裁 青年の食生活改善 金と土の子

山上参る若者入 子供組など 女達のいろいろ

倉橋島根宿細製（橋中） 娘仲間恋愛

为九回

三才圖會(卷四) 雜考 卷之四

養子 婚姻

第十四

屋敷神その他(いさ) サイの神屋敷神 借

船荷神 環溪壇内 壇内神 庚申火祭

魚の運搬 祭と魚
祭れのいづく

あいまいな所はどうしても切捨ねばならず」云々と古さやあいまいさに言及しているのだが、これは談話会の実施と談話記録のあいだがかなりあいていたからなのであって、昭和 10 年 3 月 31 日開催の第 5 回談話会記録が作成されたのは、1938/昭和 13 年 3 月のことであった。以下、奥付記事に沿って『談話会記録』を並べてなおしてみる。

(1) 1937/昭和 12 年 11 月 1 日

第 30 回民俗談話会（昭和 12 年 10 月 24 日開催）

(2) 1937/昭和 12 年 11 月 24 日

第 28 回民俗談話会（昭和 12 年 7 月 25 日開催）

第 29 回民俗談話会（昭和 12 年 9 月 19 日開催）

(3) 1937/昭和 12 年 12 月 10 日

第 31 回民俗談話会（昭和 12 年 11 月 28 日開催）

(4) 1937/昭和 12 年 12 月 14 日

第 27 回民俗談話会（昭和 12 年 6 月 27 日開催）

(5) 1938/昭和 13 年 1 月 29 日

第 21 回民俗談話会（昭和 11 年 6 月 14 日開催）¹²

第 22 回民俗談話会（昭和 11 年 7 月 12 日開催）¹³

第 23 回民俗談話会（昭和 11 年 8 月 30 日開催）

第 24 回民俗談話会（昭和 11 年 9 月 19 日開催）

第 25 回民俗談話会（昭和 11 年 11 月 28 日開催）

(6) 1938/昭和 13 年 3 月 5 日

第 1 回民俗談話会（昭和 9 年 11 月 11 日開催）¹⁴

12 宮本常一欠席のため、『「民間伝承の会」大阪支部会報』2号（1936.6）を参照しながら記述したという。

13 『「民間伝承の会」大阪支部会報』3号（1936.8）も同会のようなすを伝えている。

14 『旅と伝説』8年1号（三元社、1935.1）に「大阪民俗談話会の記録」として発言者と発言内容を掲載。

第2回民俗談話会（昭和9年12月16日開催）¹⁵

第3回民俗談話会（昭和10年1月27日開催）¹⁶

第4回民俗談話会（昭和10年2月24日開催）¹⁷

第5回民俗談話会（昭和10年3月31日開催）

(7) 1938/昭和13年4月15日

第6回民俗談話会（昭和10年4月14日開催）

(8) 1938/昭和13年6月15日

第7回民俗談話会（昭和10年5月26日開催）

第8回民俗談話会（昭和10年6月16日開催）

第9回民俗談話会（昭和10年7月14日開催）

(9) 1938/昭和13年9月16日

第13回民俗談話会（昭和10年12月8日開催）

第14回民俗談話会（昭和11年1月12日開催）¹⁸

第15回民俗談話会（昭和11年1月18日開催）

第16回民俗談話会（宮本常一欠席のため記録なし）

第17回民俗談話会（昭和11年3月7日開催）

(10) 1938/昭和13年10月22日

第18回民俗談話会（昭和11年4月12日開催）

第19回民俗談話会（昭和11年4月16日開催）

第20回民俗談話会（昭和11年5月10日開催）

*** 奥付記事なしA**

第10回民俗談話会（昭和10年9月15日開催）

15 『旅と伝説』8年2号（三元社、1935.2）に「大阪民俗談話会だより」として概要掲載。

16 『旅と伝説』8年3号（三元社、1935.3）に「大阪民俗談話会の記録（二）」として発言者と発言内容を掲載。

17 『旅と伝説』8年5号（三元社、1935.5）に「大阪民俗談話会記録」として発言者と発言内容を掲載。

18 『近畿民俗』2巻1号（近畿民俗学会、1937.2）に「渋谷先生を中心に（座談会）」（宮本常一筆録）として発言者と発言内容を掲載。

第 11 回民俗談話会（昭和 11 年 10 月 13 日開催）

第 12 回民俗談話会（昭和 11 年 11 月 2 日開催）

*** 奥付記事なし B**

第 26 回民俗談話会（昭和 12 年 5 月 30 日開催）

*** 奥付記事なし C**

第 32 回民俗談話会（宮本常一欠席のため記録なし）

第 33 回民俗談話会（昭和 13 年 2 月 27 日開催）¹⁹

第 34 回民俗談話会（昭和 13 年 3 月 13 日開催）²⁰

第 35 回民俗談話会（昭和 13 年 4 月 17 日開催）²¹

このように『談話会記録』35 回分は 13 回に分けて作成されているのであるが、この奥付記事が刊記なのか、それとも版下作成や刷り上がりにかかる成立年記なのか、今のところ判断しかねている。「会報は『大阪民俗談話会記録』として宮本常一氏が手ずからガリ版を刷って配られた」と高谷重夫はいうのだが²²、蔵書検索等において『大阪民俗談話会記録 第一集稿本』はヒットするものの、各奥付を単位とした個々の『大阪民俗談話会記録』は見あたらない。はたして、この奥付年記は刊年だろうか、それとも成立年だろうか。教示を願う次第である。

奥付記事なしの三つについて、談話会開催時期をふまえると、A は (8) と (9) のあいだあたりになりそうである。C もおなじ時期、あるいは談話会開催時期からして (5) と (6) のあいだあたりになるだろうか。ただ、B は、どうもよく分からない。ほかの『談話会記録』筆耕が宮本であったのに対して、奥付記事なし B は版下の筆跡が異なっているのである。「第二十六回は原稿を近畿民俗に送つてある」（『談話会記録』はしがき）とのことであるから、その原稿をもとに『近畿民俗』の誰かが作成したのだろうか。詳細は不明である。

19 『民俗談話会だより』（1938.2）が 2 月例会を案内する。

20 『民俗談話会だより』（1938.3）が 3 月例会を案内する。

21 『民俗談話会だより』（1938.4）が 4 月例会を案内する。

22 高谷重夫「沢田四郎作先生を悼む」、『近畿民俗学会会報』54（近畿民俗学会、1971.10）p.1。

さて、この 35 回分の談話会記録がさらに「自昭和九年十一月十一日／至昭和十三年四月十七日」の記録として実施順に再編成され、冒頭に「はしがき」五条を、末尾に芳名録「出席者芳名」（本稿 p.39）を付して『大阪民俗談話会記録 第一集稿本』として公開されることになるのだが、この芳名録が『談話記録』の肝になっているように思うのである。『談話会記録』「はしがき」三条で、宮本は「出席者芳名」について次のように述べる。

記録の誤は今後訂正して行きたいと思ひますが、資料として使用の際御不審の点があればきゝあはせられます様巻末に芳名録を附け加へました。

発言内容について知りたければ発言者に聞け。「芳名録を附け加へ」たことで、読み手個々人の現在進行形の問題意識と発言者が紐づけられていくのである。散在する点が線でつながっていく、その紐帯役が芳名録であった。

紐帯役ということからは、次のような宮本の発言が想起されましょう。

私は十七歳の時大阪に出て爾来大阪で働いて居ります。（中略）ところが居るのが大阪でありますので山口県とは縁が至つて薄くなりまして、今は堺の方では同志の者と一緒に口承文学の会を作つて昔話の採集に先づ力を注ぎ、かたはら出来るだけ全国の同志と連絡を執る。これが非常に大事なことだと思ふのでありまして、私は学問をするよりか寧ろさういふ連絡係になつて、生涯を終らうと思つて大阪に居られる澤田先生に中心になつて戴いて、多分昨日岩倉さんからお話があつたらうと思ひますが、大阪民俗談話会を起して関西一帯の民俗学徒に御出席を願つて、今日まで九回会合を続けて参りました。

23

宮本は「連絡係」すなわちメディエーターとしての役割をみずからの任とし、結び目の中心に「澤田先生」（澤田四郎作）を据えて談話会を運営していったわけ

23 「日本民俗学講習会座談会速記録」（1935 年 8 月 1 日）における宮本常一の発言。柳田国男編『日本民俗学研究』（岩波書店、1935.12）p.436。

だが²⁴、『談話会記録』は、そうした宮本の「連絡係」的性質の見てとることができる。

大阪民俗談話会が発行していたもう一つの媒体『民俗談話会だより』は、『談話会記録』とは異なって談話会実施前に配付される案内の役割を多分に有しているのだが、「会員消息」欄における現地調査情報も充実している。『談話会記録』が芳名録を通して過去の発言を今に結びつけるのだとすれば、『談話会だより』はまさに今の動向を旬のうちに共有する媒体であった²⁵。

以上、本稿で紹介するところの史料について、『談話会記録』を中心に述べてみた。同記録「はしがき」五条で、宮本は「第三十六回以後は改めてまとめます」と述べているのだが、以後「改めてまとめ」られることはなかった。

会報は『大阪民俗談話会記録』として宮本常一氏が手ずからガリ版を刷って配られたが、宮本氏が東京に去られた後は『大阪民俗談話会々報』となって活字印刷となり、さらに会が近畿民俗学会と改称されて『近畿民俗』となりました。²⁶

宮本が東京に行くにあたって催された送別会のようなすは、1929/昭和 14 年 12 月『大阪民俗談話会会報』を読みたい（本稿 p.77）。

（磯部）

24 その澤田四郎作もまた点と点を結ぶメディエーターでもあった。『「知」の結節点で 澤田四郎作 人・郷土・学問』（奈良女子大学なら学研究会編・発行、2017.7）を参照。

25 昭和 11 年 7 月 12 日開催第 22 回大阪民俗談話会の翌月に配付した『「民間伝承の会」大阪支部会報』3 号（1936.8）もまた、鮮度の高いうちに情報を共有しようとする媒体であろう。横井照秀執筆にかかる同会報では、談話の概要のほか、談話項目や語句がメモ的に記されており、参加者が当日を思い起こしながら再確認しやすいものとなっている。

26 前掲注 22、p.1。

小谷方明・太田陸郎と「出席者芳名」

「芳名録」(本稿 p.39) には、計 72 名分の氏名と住所が記されている。都道府県別でみれば、大阪府が圧倒的に多く、ついで東京都から 8 名、奈良県から 6 名、兵庫県から 5 名、京都府と和歌山県から各 1 名となる。大阪府下の内訳は、大阪市内が圧倒的に多く 20 名、泉北郡が 7 名、南河内郡が 5 名、堺市と三島郡が各 2 名、布施市が 1 名となっている。この人数分布の背景には、参加者の人的ネットワークがあると思われる。大阪市内は澤田四郎作、大阪府南部は宮本常一や小谷方明らの影響かもしれない。

大阪民俗談話会の主催者である小谷方明は、大阪府堺市上神谷に拠点を置いた研究者である²⁷。研究会を開催するだけでなく、自らも数多くの著作を出版した²⁸。小谷自身は小谷家第 39 代である。旧家として、史料提供側としても調査に協力した²⁹。前田(2007)のあとがきには、小谷は「中々話好きの方」と書かれている。大阪民俗談話会には、小谷が有した人的ネットワークが少なからず活かされているであろう。なお、小谷は昭和 5(1930)年に「和泉郷土文庫」を、昭和 46(1971)年に「小谷城郷土館」を設立した。現在も「(財)小谷城郷土館」として公開されている。昭和 51(1976)年に近畿民具学会を組織し初代会長をつとめた。

もう一人注目したい人物がいる。太田陸郎である。太田は兵庫県庁職員で、戦時中に不慮の事故のため 46 歳で逝去した研究者である。生前、太田が記した兵庫県内に関する著作は数多い³⁰。柳田國男も『故郷七〇年』(1959、のじぎく文庫)

27 本稿 p.53 および p.60 にも小谷に関する記述がある。

28 小谷は、『民間伝承』、『旅と伝説』、『上方』、『左海民俗』等に数多く投稿した。『左海民俗』を中心に、大阪府堺市における民俗を多数紹介し、堺市文化財保護委員もつとめている。主な著書として、『和泉木綿譜』(1943)、『大阪の民具・民俗志』(1982)、『村々の今と昔』(1986)等が挙げられる。

29 前田金五郎『近世文学雑記帳』(勉誠出版、2007)。

30 太田は、『民俗芸術』、『考古学』、『兵庫史談』、『兵庫県民俗資料』、『近畿民俗』や『旅と伝説』に数多く投稿している。主な著書として、『播磨民謡考』(1929)、『兵庫県百姓一揆史話』(1930)、『播州置塩郷昔踊歌』(1930)、『稿本播磨鑑 第二分冊』(1933)等が挙げられる。

で彼の功績を讃えている。太田が積極的に関与した組織として、兵庫県民俗研究会、神戸史談会、近畿民俗刊行会（近畿民俗学会）等があるが、兵庫県下の民俗学関連のネットワークには太田の人脈が存分に活かされていた³¹。

兵庫県民俗研究会は昭和 7（1932）年に創立された会であり、会誌『兵庫県民俗資料』の発行と編集を河本正義が担っていた。太田の日記によれば、同年 11 月 27 日には、大阪の澤田四郎作を河本と訪問し、『近畿民俗』の出版に関する打ち合わせをしたことが記されている³²。大阪民俗談話会第 13 回（昭和 10 年 12 月 8 日）には、太田と河本、そして玉岡松一郎といった兵庫県民俗研究会会員が出席者として初めて確認できる。彼らの大阪民俗談話会初参加は、メディエーターとしての澤田四郎作の功績の一端かもしれない。

なお、その後も彼らの参加は応召されるまで継続する。太田の発言は各所に確認できる。第 18 回では「太田氏より近畿民俗誌についての原稿印刷などの事につき報告あり。且兵庫県産育習俗調査を一般にくばりたい旨」（p.125）があったという。大阪民俗談話会は、大阪府を中心とした府県を超えた知識交換の場にもなっていたと思われる。

（岡本）

31 岡本真生「太田陸郎」、『兵庫県の祭り・行事——兵庫県の祭り・行事調査報告書』（兵庫県教育委員会文化財課編、2020、pp.308-314）。

32 太田の昭和十年の日記は、加茂幸男『太田陸郎伝——民俗学者太田陸郎を語る玄圃梨の記』（私家本、1992）に転載されているが、原本は確認できない。

凡例

- 以下の目次細目は、合綴順に並べてある（本稿 p.7 参照）。「談話会記録」（第 1 回民俗談話会～第 35 回民俗談話会）は岡本が、「民俗談話会だより」以降は磯部が入力を担当した。
- 談話会については、『談話会記録』は各回の開催場所、出席者、話題と備考を立項した。『談話会だより』以降は各号で立項されている項目を採用した。
- 翻刻や引用にあたり、入力と読みやすさの便から、旧字体は新字体に改めた。判読不能箇所については□（白抜き四角）で示した。「桺田」は「柳田」で入力した。また、段落改行は／（全角スラッシュ）で示した。
- 人的交流のありようを可視化するべく、フィールドワークや応召に関する記事については「現地調査」「応召関係」を立項し、そこに記事を引用した。
- 引用記事の選択基準について、談話会の開催状況や会の動向が分かる記事を引用するとともに、入力担当者の興味関心も反映させることを心掛けた。その意味ではきわめて主観的な引用ということになるが、本目録が単なる資料紹介にとどまらず、研究の進展や読者の興味関心に積極的に関与していこうというおもわくゆえのことである。諒とされたい。

目次細目

談話会記録 第1回～第5回

昭和十三年三月五日 代筆記／大阪市外鳳町 宮本常一

第1回民俗談話会（1934/昭和9年11月11日）

場 所 浜寺公園海の家

出席者 沢田四郎作、桜田勝徳、岩倉市郎、杉浦瓢、南要、鈴木東一、宮本常一、
小谷方明

備 考

- このときの話の内容は民俗関係のもののみまとめて、旅と伝説八巻一号（昭和十年一月）に発表した。（p.3）

第2回民俗談話会（1934/昭和9年12月16日）

場 所 澤田四郎作宅

出席者 横井照秀、玉岡松一郎、河本正義、出口米吉、笹谷良造、岸田定雄、宮
武省三、水木直箭、岩倉市郎、桜田勝徳、杉浦瓢、南要、鈴木東一、宮
本常一、小谷方明、沢田四郎作

話 題

- この会の喜びは宮武 出口 両先輩の出席下さったことである。（中略）その他の方々もすでに一家を成して居られ、いはゞ関西在住のこの学に志す者の一大会合であつた。話は従つて甚だはづみ、到底筆録は出来なかつた。この概要、及記念撮影は、旅と伝説八巻二号（昭和十年二月）にのせたが、（後略）（p.3-4）
- （1）海岸に於ける焚火（和泉石津、駒ヶ林、九州十島）、（2）左義長（兵庫駒ヶ林）、（3）相撲の習俗（伊予浮穴、播磨多聞寺、兵庫県佐用郡石井村）、（4）凶事予報の動物（河内）、（5）島の祭（薩南諸島中之島）、（6）覗き眼鏡（神戸）、（7）つきものの話

各地の例

京都府に於ける物のほかり方(山田)

京都府下島に於ける労働軍位(山田)

石臼の製造より

第三十三回

銀治屋を中心

京都府聯合生中心

第三十四回

木地屋報告(山田)

第三十五回

京都の民俗(山田)

京都の民俗

京都の民俗

地方名録

二九七

談話會記録 第一回より第五回まで

● 第一回

五倍子雄筆を二巻録

「九年(昭和九年)の豫定期に於て、私の限なくうめしがつたのは、十月二十七日の朝でした。突然神田西男先生から電話がかゝり、今日帝塚山の女子専門学校に於て講演するものは、私一人、久し振にあつた、又いろいろ紹介したさんもあるから是非来いとの事でした。東京の砦村の先生の書斎に最後にお訪ねしたのが、四十四年の昔となつてゐました。今日の電話で先生の本声ときいた喜びは非常なものでした。早速出かけて先生の「日本民俗学の提唱」なる講義を聞きました。平林治彦氏や森田教授、岩倉市郎、教

育者氏にも紹介され、それより先生の自筆書に岩倉、森、水本等と同席さしてもらつて、若松所の大隈地方裁判所所長の官邸で、増田晴彦君を訪ねられ、我々も紹介せられた。増田君は所長の令息で、かねより九州の島々の民俗に詳しく最近「琉球民俗誌」を著はさへゐる人である。ここへ御馳参になつて九時半過ぎに至るまで先生を中心いろいろと話を承りました。その中大隈を中心に民俗学は志を聞く人々が月一回の会合をしてはどうかとの言葉があり、と砦村博士は書いて居られる。一方その翌日、岩倉氏は京都下鴨を石臼旅館に帰られ

- 海岸に於ける焚火／和泉石澤の火渡神事は海岸の住民が沖なる船を暗礁にさそひ寄せて難破せしめ財宝をとる習俗を起源とせるものではないか。西洋の燈台の起源は多くは之である。(p.4)
- 相撲の習俗／伊予浮穴には村界に相撲場があり、勝った土地が水利権を得た。(p.4)

第3回民俗談話会（1935/昭和10年1月27日）

場 所 澤田四郎作宅

出席者 織戸建造、田中和雄、南木芳太郎、山口康雄、雑賀貞次郎、岩倉市郎、横井照秀、玉岡松一郎、河本正義、小谷方明、桜田勝徳、岸田定雄、南要、宮本常一、杉浦瓢、鈴木東一、沢田四郎作

話 題

- 大隅百引村採集調査報告（桜田勝徳）

備 考

- この記録は 旅と伝説八巻三号（十年三月）にのせた。従つて同誌を参照されたい。(p.6)

第4回民俗談話会（1935/昭和10年2月24日）

場 所 澤田四郎作宅

出席者 高田十郎、中尾新緑、桜田勝徳、山口康雄、青山冬樹、鈴木東一、岩倉市郎、杉浦瓢、織戸健造、小谷方明、和泉国夫、宮本常一、沢田四郎作

話 題

- つきもの、妖怪
- この会の話題は「つきもの」「妖怪」についてであつた。奈良の高田十郎先生が初めて出席せられて、先生のこの方面に関する詳しい報告があり、話もよくはづんだおもしろい会であつた。(p.6)

備 考

- この記録は 旅と伝説八巻五号（十年五月）にのせた。尚次回以後は雑誌発刊の計画があつた為旅と伝説への掲載を中止した。（p.6）

第 5 回民俗談話会（1935/昭和 10 年 3 月 31 日）

場 所 澤田四郎作宅

出席者 小谷方明、桜田勝徳、杉浦瓢、岸田定雄、山口康雄、横井照秀、宮本常一、鈴木東一、沢田四郎作、菅原正二

話 題

- 入村者、出村者
- 小谷方明「泉州に於ける紀州出稼人」→談話項目「バンク」「お多賀さん」「座の制度」
- 杉浦瓢「米搗き部屋」→談話項目「ワタクシ」「手拭」「新参者いぢめ・制裁」「ノージ その他」「奉公人分裂」
- やつと第一回からの整理にかゝる様になりました。第六回まではすでに原稿が整理されてゐるので楽ですが、それから後は書き放しのまゝで至つて不備、今よんで見ると分らぬ点が多く、困つたものだと思つてゐます。併し整理してみると、会の様子などが思ひ出されてなつかいしい限です。（p.22）

備 考

- 項目毎に、発言者名と発言内容が記録されている。一例を挙げる。

▲バンク

沢田 大阪では召使や独身者が逃げるのをバンクするといふ。

杉浦 河内でもさういふ。（p.11）

民俗談話会記録 第 6 回

昭和十三年四月十五日 以謄写代筆記／大阪市外鳳町 宮本常一

第 6 回民俗談話会記録 (1935/昭和 10 年 4 月 14 日)

場 所 澤田四郎作宅

出席者 岩倉市郎、横井照秀、菅原正二、宮本常一、水木直箭、足立精一、藪重孝、杉浦瓢、小谷方明、鈴木東一、岸田定雄、山口康雄、青山冬樹、渋沢敬三、沢田四郎作

話 題

- 小谷方明「和泉の頼母子」
- 藪重孝「徳川時代の幣制」
- 岩倉市郎「喜界島の葬制に見えた相互扶助」→「葬制二三」を立項
- 杉浦瓢「南河内丹比の相互扶助」→「他所者に対する待遇・恋」を立項
- 山口康雄「和泉葛畑の相互扶助」→「番太」、「頼母子の計算」、「子供の相互扶助」を立項

備 考

- 足立さんがここまで話されたとき渋沢敬三先生がおいでになった。それから先生を中心に先づアシナカが話題にのぼった。(p.37)

民俗談話会記録 第 7 回～第 9 回

昭和十三年六月十五日 以謄写代筆記／民俗談話会第八、九回分／大阪市外鳳町宮本常一

第 7 回民俗談話会 (1935/昭和 10.5.26)

会 場 澤田四郎作宅

出席者 桜田勝徳、水木直箭、伊藤櫟堂、岩泉千真伎、藪重孝、高谷重夫、岸田定雄、平山敏次郎、鈴木東一、玉城実盛、井野辺天籟、織戸健造、岩倉市郎、西浦伊一、宮本常一、沢田四郎作

話 題

- 一定せず、歓談に時をすごした。尚 宮本選挙のため筆録せず。(p.39)

第 8 回民俗談話会（1935/昭和 10.6.16）

会 場 澤田四郎作宅

出席者 高落松男、横井照秀、鈴木東一、玉岡松一郎、杉浦瓢、山口康雄、岸田定雄、雑賀貞次郎、織戸健造、水木直箭、岩倉市郎、片岡長治、宮本常一、沢田四郎作

報告と話題

- 最初に宮本が亥の子行事について各地に於ける例を報告した。（筆録せず）
（p.39）
- 横井照秀「倉橋島の娘宿」→談話項目「ほめられる青少年」「制裁」「青年の気風・若者宿」「盆と亥の子」「山上参・若者入」「子供組など」「女講のいろいろ」
- 横井照秀「倉橋島の娘宿細説」→談話項目「娘仲間・恋愛」
※ やゝ重複するが横井氏は二回にわたつてこの娘宿の話をせられたので筆記が二ヶ所にあり、整理にあたつてこの不備を見るが、之は一つにまとめるべきものであると思ふ。がここではもう一度書いておく。
（p.51）

後 記

- この話（横井照秀報告——磯部注）のあとで雑賀氏から職人の習俗採集についての方法、態度に関する興深いお話があつたが十分筆録出来なかつた。
（p.56）

備 考

- 各テーマに対する談話内容は、発言者の出身地および調査地の民俗紹介である場合が多い。たとえば、高落は河内を、杉浦は南河内を、山口は泉南南部を、岸田は大和を、玉岡は播磨をといた具合である。
- 鬼追い関連）播磨の白浜八正寺の鬼迫には村からきらはれる者が鬼になつた（玉岡の発言）（p.42）

第 9 回民俗談話会 (1935/昭和 10.7.14)

会 場 澤田四郎作宅

出席者 小谷方明、水木直箭、藪重孝、宮本常一、岸田定雄、玉岡松一郎、山口康雄、青山冬樹、杉浦瓢、伊達俊光、鈴木東一、沢田四郎作

話 題 談話題目「入村者 出村者」

- 岸田定雄「モンドリ」
- 「結婚の問題」、「女中奉公、その他」、「養子の話」、「婚姻の習俗」

後 記

- 古い記録なのと、筆記が不完全なのであいまいな所はどうしても切り捨てねばならず、従つて、意にみたくないものになりました。もう一つ困つた事は談話を進行するために言った私の言葉を筆録してゐないために何を見ようとしてゐたかが甚だばやつとしてゐます。(p.66)

備 考

- 「後記」から、当時の座談会を回想していることがいえる。

民俗談話会記録 第 10 回～第 17 回

昭和十三年九月十六日 以謄写代筆記／大阪府泉北郡鳳町 宮本常一

第 10 回民俗談話会 (1935/昭和 10.9.15)

会 場 澤田四郎作宅

出席者 鈴木太良、岸田定雄、宮本常一、和泉國夫、後藤貞夫、鈴木東一、小谷方明、山口康雄、片岡長治、高谷重夫、志賀勇、杉浦瓢、水木直箭、織戸健造、伊藤櫟堂、八木清蔭、伊達俊光、沢田定司、沢田四郎作

話 題

- 初めての方が多かったので、先づ自己紹介をしていただいて、「小さな祠とその祭祀法」について話しあつた。先づ小谷氏から和泉上神谷村の例をおうかがひした。(p.67)

- 小谷方明「屋敷神その他」→ 談話項目「サイの神、屋敷神」、「帯祭」、「稲荷神その他」、「環濠垣内」、「垣内神、庚申、火祭」、「魚の運搬 祭と魚」、「祭礼のいろゝ」

後 記

- この回の会は話が実に豊富で次回でも引続いて話しあふ事になったのであるが、筆録が不完全なのと、すでに記憶がうすらいであるので、多くを切り捨てねばならなかつた。／尚この時、慶應義塾の鈴木太良氏が来会下さつて色々お話を承り、氏の御好意によつて、大阪市北区太融寺町にて葬儀又は大名行列の型を見学させていただいた。九月二十二日であつた。(p.78)

備 考

- 本会開催の一週間後に、鈴木太良（慶應義塾）の厚意によって、大阪市北区のフィールドワークを実施している。

第 11 回民俗談話会（1935/昭和 10.10.13）

会 場 澤田四郎作宅

出席者 後藤貞夫、岩泉千真伎、平山敏治郎、後藤捷一、志賀勇、横井照秀、青山冬樹、杉浦瓢、宮本常一、高谷重夫、鈴木東一、伊達俊光、織戸健造、玉岡松一郎、岸田定雄、南木芳太郎、沢田完司、和泉國夫、沢田四郎作

話 題

- 後藤捷一「民間染色」→ 談話項目「竈の信仰」「便所の信仰」「祭礼行事」

備 考

- 「後記」記載なし。談話記録で終えている。

柳田先生還暦記念講演会

- 十月二十八日はまことに意義ある日で、本会主催の下に朝日新聞社大講堂で柳田先生還暦記念講習会をひらいた。／講師として西田直二郎博士、折口信夫博士、大間知篤三氏、遠くウィーン大学のシュミット博士も御講演を請ひ徴収四百、斯学隆盛と柳田先生の学徳を目のあたり見る事が出来た。／先生

の挨拶も又聴衆の心をうった。之がやがて連続講習会への導火線ともなり、学会の隆盛期に入ったのである。(p.91)

備考

- 講師の名前のなかに、シュミット博士の名前が確認できる。

第12回民俗談話会（1935/昭和 10.11.2）

会場 染料会館

出席者 32名

話題

- 東京より橋浦泰雄氏 守随一氏も来会され、柳田先生を中心の大座談会であつた。／先づ先生より都市民俗採集についての注意すべき事柄をのべられ、大阪堺は共に古風なる町であるから多くの採集すべきものがあるであらうとの御教示を、ウィーンを例にひいて説かれた。(p.92)
- 更に歓談、夜半散会したのであつた (p.92)

後記

- 此の頃の会員諸氏の採訪熱はきはめて旺盛でその好む所に向つて精進せられた。／尚ここに銘記すべきことは後藤捷一氏の御厚意によつて此の會から染料会館を借用する事になつた。／尔来すでに三年今日も尚お世話になつてゐる有様である (p.92)

備考

- 今回がはじめての会場変更であつた記述が確認できる。
- 出席者も氏名ではなく人数を記す。

第13回民俗談話会（1935/昭和 10.12.8）

会場 大阪市東区唐物町 染料会館

出席者 横井照秀、水木直箭、小島勝治、奥田花門、滝良吉、福島公肇、高落松男、沢田四郎作、岸田定雄、奥田喜一郎、山口康雄、後藤捷一、杉浦瓢、太田陸郎、河本正義、藪重孝、平山敏治郎、玉岡松一郎

他七名

話 題

- 横井照秀「遊郭の話」→ 談話項目「食物をめぐる」

後 記

- （この後で雑誌の件につき委員から原案の発表があつた。隔月に一回、第一年は神戸へ願ひする、といふ様な案で、その翌年一月に近畿民俗が創刊された）(p.100)

備 考

- 太田陸郎の初参加である。談話記録では、太田の発言が記されている。だが、太田の発言の後に（ ）内につぎのように記されている。「ここまで話して委員たちは雑誌近畿民俗創刊の協議に入ったために残った者で話をすすめたが殆ど雑談に終つた」(p.98)。

第 14 回民俗談話会（1936/昭和 11.1.12）

会 場 澤田四郎作宅

出席者 記載なし

話 題

- この日は渋沢敬三先生がわざ、おいで下さつてアチツクのフィルムを染料会館でお映し下さつた。それまでの時間を澤田先生のお宅で座談会をなし、この記録は近畿民俗にのせた。／染料会館の方での会も先づ渋沢先生からアチツクの仕事と民俗学における第一部門即ち生活技術に関する採集の忽にせられざる所以の講演ありその後で十島、三面、越後、桑取谷などのフィルムを映写していただいた。(p.101)

備 考

- 場所は澤田宅と染料会館を使用したと推察される。

第 15 回民俗談話会（1936/昭和 11.1.18）

会 場 澤田四郎作宅

出席者 記載なし

話 題

- この会では二十五回連続講習会の計画についての協議が主で民俗的な座談はきはめて少なかった (p.101)
- 談話項目「宮座」

備 考

- 第 15 回は、第 14 回のわずか 6 日後に開催された。

第 16 回民俗談話会（不明）

- 第 16 回例会は小生不参のために記録がのこつてゐない。その日時も記憶にない。まことに恐縮な次第である (p.103)

第 17 回民俗談話会（1936/昭和 11.3.7）

会 場 染料会館

出席者 織戸健造、小島勝治、後藤捷一、沢田四郎作、平山敏治郎、持田篤文、水木直箭、岸田定雄、玉岡松一郎、宮本常一、鈴木東一

話 題

- 織戸健造「和泉西葛城村の民俗」
- 小島勝治「てまりの話」→ 談話項目「盃の話」「初座のはなし」「(項目名なし)」「(「出稼者」や「世間師」についての談義)

備 考

- 昭和十三年九月十六日 以謄写代筆記／大阪府泉北郡鳳町 宮本常一 (p.112)

民俗談話会記録 第 18 回～第 20 回

昭和十三年十月二十二日 以謄写代筆記／大阪府泉北郡鳳町 宮本常一

第 18 回民俗談話会（1936/昭和 11.4.12）

会 場 染料会館

出席者 志賀勇、山口康雄、高谷重夫、小島勝治、河本正義、水木直箭、織戸健造、鈴木東一、宮本常一、後藤捷一、野々村勇吉、横井照秀、岸田定雄、玉岡松一郎、太田陸郎、沢田四郎作

話 題

- 岸田定雄「鳥取県東伯郡三朝石工の話」
- 鈴木東一「天草五所浦島興一浦見聞」
- 太田陸郎「ヒルマキ」→ 談話項目「酒宴のこと」

後 記

- それより植物に関する方言と禁忌について各自の見聞を話あつたが十分に筆録せず。／ついで太田氏より近畿民俗誌についての原稿印刷などの事につき報告あり。且兵庫県産育習俗調査を一般にくばりたい旨を話された。（p.125）
- 尚今後の会合にかういふものを持参して見聞をひろめては…との提唱があつた（p.125）

備 考

- 「酒宴のこと」は、宮本常一と太田陸郎のやりとりである。

第 19 回民俗談話会（1936/昭和 11.4.16）

会 場 染料会館

出席者 この時の出席者は不明である。土佐への調査に行かれた櫻田勝徳氏をお迎へしてその土産話を承つた。まことに愉快的な会合であつた。この調査報告はアチツクミウゼウムノート（土佐四万十川の漁業と川舟）の一冊として公にされてゐる（p.127）

話 題

- 櫻田勝徳「漁業民俗の見聞」

後 記

- この時の話は非常に精密であつた事を記憶するが、この程度にしか書きとめてゐない。而もよんで見て意の通じない所がある。氏の著書によつて訂正したいが多忙のうちなのでこのまゝにしておく。尚この時の一般座談はどうしたのか筆記してゐない。(p.133)

備 考

- 第 19 回は、前回からわずか 4 日後に開催された。
- 報告のなかに、手書きスケッチが散見される。

第 20 回民俗談話会 (1936/昭和 11.5.10)

会 場 染料会館

出席者 太田陸郎、小島勝治、藪重孝、平山敏次郎、岸田定雄、織戸健造、鈴木東一、沢田四郎作、宮本常一

話 題

- 「閉会前の雑談聞書」(太田の発言から)
- 太田陸郎「市について」→ 談話項目「市をめぐりて」

談話会記録 第 21 回～第 25 回

昭和十三年一月二十九日 以謄写代筆記／大阪市外鳳町 宮本常一

- 第二十回の頃から私(宮本)は務の方が非常に忙しくなり、会のお世話が十分に出来なくなつた。そこで横井照秀氏がかはつて色々御世話下さる事になつた。二十一、二十二、二十三と四をかさねて、九月から民俗学連続講習会が初り、談話会は中止の形となり、講習会中、柳田先生をお迎へして二回ほど開いたにすぎなかつた。／この間私は非常に気持ちも楽になつて、筆記も十分にしなかつた。従つて一番不成績になつてゐる。併し横井氏の方に筆記がのこつてゐるかも分らぬ。もしあれば後ほど補ひたいものである。(p.1)

第 21 回民俗談話会（1936/昭和 11.6.14）

会 場 染料会館

出席者 水木直箭、西谷勝也、西池憲治、木村重一、横井照秀、鈴木東一、平山敏治郎、沢田四郎作、持田篤文、小島勝治、芥子久一郎、杉浦瓢、山口康雄、織戸健造

話 題

- 横井照秀「奈良県吉野郡迫川村の若者に就いて」

後 記

- 此日私は出席しなかつたので、横井氏の書かれた大阪支部会第二号によつて談話内容を補ひたい（p.1）

備 考

- 西谷勝也の名前が初めて確認できる。

第 22 回民俗談話会（1936/昭和 11.7.12）

会 場 染料会館

出席者 小島勝治、高谷重夫、森崎国雄、杉浦瓢、沢田四郎作、太田陸郎、岸田定雄、土屋充、横井照秀、水木直箭、藪重孝、宮本常一、後藤捷一、持田篤文、鈴木東一、櫻田勝徳

話 題

- 小島勝治「綿作の話」→ 談話項目「綿作を中心に」
- 杉浦瓢「河内の灌漑用水」→ 談話項目「灌漑を中心に」
- 持田篤文「大和忍海村笛吹の灌漑」
- 持田篤文「大和忍海の習俗二三」
- 宮本常一「河泉の灌漑用水」

後 記

- 尚小谷方明君から池に関して上神谷村の報告があり、之は書信によつたもので、十一年度の会報三に出てゐる（p.18）

民俗学講習会委員会席上にて

- 七月二十七日日本民俗学長期講習会開催につき、沢田、水木、藪、柴田、岸田の各委員及小生、大阪クラブに江崎政忠氏木間瀬策三氏を訪れ、委員会をひらいた際、その席上にて江崎政忠氏の語れる処を筆記して見たのが左記のものである。(p.18、冒頭六行)

第 23 回 例会 (1936/昭和 11.8.30)

会 場 沢田氏宅

出席者 13 名

後 記

- 右は横井氏が民間伝承に報じた処である。朝鮮半島海の見聞については近くアチツクからその記録が出る筈である。杉浦氏の議はまことに興味深いものであつたが記録しそこねた。(中略)／九月十二日民俗談話会の諸彦によつて私の周防大島を中心とせる海の生活誌の出版記念会をひらいていただいた。／九月十九日いよいよ民俗学の連続講習会がひらかれた。この夜柳田先生をお迎へして染料会館で第二十四回談話会をひらいた。この時は会の事務などに関することが主で民俗に関する事は少かつた。私のノートに所も名も書かず、耳にとまつた事が少々書きとめられてゐる。何かのたしになると思ふから書いてゐる。(p.21)

備 考

- 宮本常一の出版記念会が開催された。
- 参加者氏名は宮本のノート記載情報にもとづくと考えられる。その理由は次の二点である。まず、「私のノートに所も名も書かず」とあること。二つ目は、これまで参加者氏名も順不同であることである。

第 24 回 民俗談話会 断片 (1936/昭和 11.9.19)

会 場 染料会館

出席者 沢田先生、沢田、太田、藪、水木、横井、岸田、杉浦、平山、岡見、高谷、その他諸氏

- 大体以上の様なものであった。この話によつて、大和五条の人森本重雄氏から左の報告があつた。これは会の様子を同氏に話した所から得た一資料である。(p.20)

話 題

- 川に流すもの
- 櫻田勝徳「山あがりその他」

備 考

- タイトルに「断片」と記されている。

第 25 回民俗談話会（1936/昭和 11.11.28）

会 場 染料会館

話 題

- 柳田先生が民俗学講習会の講義の為に御来阪になられたのを機に染料会館に集つて有志の談話会をひらいた。(中略)／この要領は「日本民俗学講習会報第五号三頁」へのせておいたのでここでは省略し、その次に諸氏の報告せられた色々の話を左に採録する。(p.25)

後 記

- 書きおとしが多いので今よんで見ると読者に対してすまぬ気のする点が多い。自分の話した部分など少しも記録してないので何を言つたかさへ分からぬ。お粗末であり、もう少し早く整理すればよかつたと思ふ。筆記誤りの点は御訂正方をお願い申します。(p.30)

第 26 回民俗談話会（1937/昭和 12.5.30）

奥付記事なし

よる。

治産 各屋の分布やその町はどんなものか
あらうか。

神田 イウ 説りながらなくさつたでまううを
とまめで見るといふ町が合つて来る。

鬼の腹合の地方はよつ々ちがあらは一面むい。
鬼思 カエ下といふのはどんなんのやでせうか。

神田 雲母なるや神といふ。
(「セーヤ」はつていふ傳説せる者なり)ノセ

ニモロイ井戸、大坂、御山、御伊、御賢、
野郎は合つてまわす様だま。狐母とも鬼話

がある様である。丹波あたりには島嶼は
まづ及んでゐる。

神田 飯沼屋の傳説の確據を考へるは伊勢

第二十 大国民談話會記録

昭和十二年五月二十日 日曜午後
二時より大阪史料會館にて

出席者 岩泉千真侯 井野辺天巖
大田陸郎 山田隆夫 五明砂

小島勝治 澤田四郎作 孝田之雄
宮本常一 早山秋次郎 鈴木東一

● 衆を中心にして 宮本常一筆談
山田 井戸と理める時、理めるうに
何か方法はないか。

沢田 理めるのは悪いといはれてゐる。それ
で砂の粒をいれろといふ。

五明 神宮をよめはしないか。
山田 一族の誰かゝ来りやも様である。

● 佐村が即いた。

山田 王コナのもとはどんな意味でせう。
神田 王コナは恐しいといふ意味もある。

高谷 王コナといふ神がある。王コナは
といふ形客語に現れたいと願望をこころを意味。

神田 王コナ、取つていふと今ある。
(「王コナ」といふが、今よく見ると神

宮はむしてすきまをのすきまが多い。自今
の語したるが今少しの距離にたつた。

阿古 王コナはさへ今ある。王コナはつあり、
もう少し早く整理すればよかつたと思ふ。

● 佐村談話會は傳説を考へるは伊勢
昭和十二年五月十九日、以廣島代筆記

大阪市外野町 宮本常一

大田 井戸は理める時感にオダといふ
水があるがそれとはつす。兵庫では水又

マシとはつす。伴い理めるうが原則であ
五明 理めないので蓋としてある様だ。

大田 それも石の蓋とする様である。
沢田 田圃の井戸は木の蓋かしてその下に

泥がのこされてあるのがあふ。之は飢饉
の時掘り起して水と汲む。

大田 傳説にもやつてある。蓋は石であ
る。

沢田 流を井戸と昔は言つた様で、
イカハと言つてゐる。

宮本 琉球では井戸とカアと言つてゐる。
岸田 井戸と掘るのは近頃の様であるが、

会 場 染料会館

出席者 岩泉千眞伎、井野辺天籟、太田陸郎、山田隆夫、五明砂、小島勝治、沢田四郎作、岸田定雄、宮本常一、平山敏治郎、鈴木東一

話 題

- 宮本常一筆録「家を中心に」
- 井野辺氏談話要領「松山音頭」
- 山田生「談話会補遺」

備 考

- 宮本常一筆録「家を中心に」
- 井戸に関する習俗の談話がなされている。
- 版下の字は宮本のものではないと思われる。

第 27 回民俗談話会（1937/昭和 12.6.27）

以謄写代筆記／昭和十二年十二月十四日 大阪市外鳳町 宮本常一

会 場 染料会館

出席者 岸田定雄（奈良県添上農学校）、山田隆夫（西宮市津門稲荷）、杉浦瓢（堺市中向陽町）、平山敏治郎（京都帝国大学国史研究室）、小島勝治（布施市西堤）、鈴木東一（堺市三国ヶ丘町）、中西歳盛（大軌沿線花園駅前）、五明砂（大阪市東淀川区三国鈴通）、木村徳一（大阪毎日学芸部）、宮本常一（大阪市外鳳町）³³

話 題

- 此日会の長老沢田博士はお宅の都合で遂にお見えにならなかつた。併し東京から大藤時彦氏が見え、開村調査の事についての大要及希望についてのべられた。／話は宮本が六月に歩いて来た越前白木、若狭丹生、日向の漁村に於ける村の組織を中心に約一時間のべ、ついで岸田氏の方言談あり、更に話題

33 杉浦瓢と鈴木東一については番地まで明示してあるが、ここでは省略した。

の田植え行事に入った。／宮本の話した分は後日改めて整理して発表したい。

(p.1)

- 岸田定雄「鳥勸請・タガメ」→ 談話項目「田植を中心に」、「田植」、「田植初」、「田植の食事」、「再び田植」、「田植休」、「田植拾遺」

後 記

- 以上の外に、阿波のカリコ牛、備後の鞍下牛その他の例が沢山出、又一日に田植をますます週間、湖山長者への連関など多く出たが予定枚数をこえるし書物に見える事で省いた。本年は之で記録を終る。一日に書いて刷つてしまふとするのでお粗末になつた。明日から学期末の整理にかゝらねばならぬ。よい年を迎えます様。(十二月十四日午後七時教室にて) (p.18)

備 考

- 大藤時彦の名前が初めて確認できる。

民俗談話会記録 第 28 回～第 29 回

昭和十二年十一月二十四日／以謄写代筆記／大阪府泉北郡鳳町 宮本常一

第 28 回民俗談話会 (1937/昭和 12.7.25)

会 場 染料会館

出席者 山田隆夫、小谷方明、太田陸郎、沢田四郎作、山口康雄、宮本常一、水木直箭、小島勝治、鈴木東一（発言順）

話 題

- 山田隆夫「七夕及盆行事」→ 談話項目「兵庫県大庄村を中心に」、「盆行事を中心に」、「送り神補遺」

第 29 回民俗談話会 (1937/昭和 12.9.19)

会 場 染料会館

出席者 沢田四郎作、高谷重夫、鈴木東一、宮本常一

話 題

- 宮本常一「平郡島及安下庄浦の村制度」

後 記

- この日は僅か四名で甚だ振はなかつた。そこで話題の「物の初と終に関する習俗」を中止として、宮本が平郡島及安下庄浦の話をして解散した (p.13)

第 30 回民俗談話会 (1937/昭和 12.10.24)

昭和十二年十一月一日／^(ママ)以謄写代筆記／大阪府泉北郡鳳町 宮本常一

会 場 染料会館

出席者 後藤捷一、平山敏治郎、山田隆夫、岸田定雄、鈴木東一、杉浦瓢、宮本常一、沢田四郎作

話 題

- 岸田定雄「イヌビワの方言」→ 談話項目「イヌビワに関する話」
- 岸田定雄「カンジヨウ縄」→ 談話項目「カンジヨウに関する話」、「青少年の信仰」、「信仰せられる神」、「禁忌 その他」

後 記

- 語られた中興味あるいくつかの話を書きとめ得なかつた。(p.15)

* 応召関係 (太田陸郎、玉岡松一郎)

- 会後 太田氏玉岡氏へ寄せ書をなす。(p.15)

第 31 回民俗談話会 (1937/昭和 12.11.28)

以謄写代筆記／昭和十二年十二月十日／大阪府泉北郡鳳町 宮本常一

会 場 染料会館

出席者 後藤貞夫、杉浦瓢、小島勝治、西谷勝也、沢田四郎作、山田隆夫、宮本常一、鈴木東一、岸田定雄

話 題

- この日はわざわざ播磨の西谷氏が来られて会をにぎはして下さった。西谷氏は之からも出来るだけ出席して下さるといふ。温厚にして熱心なる学徒の氏を度々お迎へする事は嬉しい。／今次の事変のため、久しくお顔の見えなくなつた玉岡氏の消息のうかいへたのもうれしい。／又殆ど消息もきかれなくなつてゐた横井氏を沢田博士が古本展で見かけたといふお話も、同氏が全然民俗学から遠ざけられたものでない事が分つて、今後を御期待申さう。(p.16)
- 「信仰を中心に志て」
- 「戦争に関する俗信」

後 記

- 文化がすゝんでもかうした信仰だけは決してほろびない。そのよつて来る処は考へて見ねばならない。学問が迷信だと排斥して来た様なことがかういふ世にはかへつて盛行し、皇軍を強からしめ又美談を作る。人の世に神々の死といふことはどうやらないらしい。(p.16)

第 32 回民俗談話会

- 記録なし
- 冒頭目次によれば、「物の単位と労働量」、そして杉浦による「河内丹生」、「各地の例」、山田による「欧州諸国に於ける物のはかり方」、宮本による「周防大島に於ける労働単位」、そして「石徹白騒動記より」の項目が設けられたことがうかがえる。

民俗談話会記録 第 33 回～第 35 回

奥付記事なし

第 33 回民俗談話会 (1938/昭和 13.2.27)

会 場 染料会館

出席者 小島、杉浦、山田、岸田、山口、小谷、柴田、沢田、鈴木、宮本

話 題

- 「鍛冶屋を中心に」
- 「家族連合を中心にして」
- 「家移り」

後 記

- 戦時下における近畿民俗学会の活動を模索した内容を、約 1 頁の紙幅を割いて記している。会の在り方を検討するうえで重要と思われるため、全文を下記に記す。

此の会の後 会を今後どうしたらよいかと言ふことについて意見を交換した。事変が起つてから会への出席者は急に減つた。呑気なことなんか言つて居られない、といふ様な気持もあつたのであらう。その他色々な原因があつたと思ふ。とに角一時中止して見てはといふ様な気持にまでなつた。／それをたとへ三人が一人になるまでも続けようと沢田博士が言つて下さつて続ける事になつた。会の方法も拙かつたし、雑談にすぎないと思はれる様なこともあつた。學問から遠のいて行く様に思はれたこともあつた。併し考へて見ると退却したのではない。學問が學問として純粹化して行く途上のやうに思へた。退嬰的な私の心をはげまして下さつたのは實に沢田博士であつた。続続けるとすればどんな方法をとればよいか？之が問題になつた。結局採集に力をそそいで見るのが第一の問題であつた。かくて、会は続き、且今日の方の御協力となつたのである。／此会での意見も痛切であつた。かくて我々も時代に生きて居る事を意識した。(p.274)

備 考

- 今号のみ参加者の表記が苗字のみである。

第 34 回民俗談話会 (1938/昭和 13.3.13)

会 場 染料会館

出席者 沢田、山田、小島、西谷、鈴木、橘、宮本

話 題

- 山田隆夫「木地屋調査報告」

* 現地調査 (山田隆夫)

- 山田氏は多くの写真を示されつつ話をすすめられたもので、この記録だけでは十分諒解出来難いと思ふ。併し之によつて、西播の木地屋の居住状態はよく分る。氏は更に因幡方面の調査に赴いた。(p.286)

備 考

- 山田氏による報告に関する記述で、計十二頁に及ぶ。こうした記録の豊富さは、筆記者である宮本の興味関心の一端を示すと推測される。

第 35 回民俗談話会 (1938/昭和 13.4.17)

会 場 染料会館

出席者 沢田、平山、高谷、岸田、玉岡、鈴木、小島、宮本

話 題

- 岸田定雄「茅の民俗」(談話項目「諸々の民俗にわたりて」)

出席者芳名³⁴

第一回以来の出席の方々の芳名を銘記致します。但し住所変更にて新住所不明の方は住所欄を空白にいたしました。尚敬称を省略いたしました。あしからず。

小谷方明 大阪府泉北郡上神谷村

34 住所の掲出は市町村名までとし、番地記載の場合は省略した。なお、府県不明記のものは適宜補った。

杉浦瓢	大阪府堺市中向陽町
鈴木東一	大阪府堺市三国丘町
南要	大阪府泉北郡和泉町一条院
宮本常一	大坂府泉北郡鳳町
沢田四郎作	大阪府大阪市西成区玉出本通
桜田勝徳	東京市芝区三田綱町 アチツクミウゼアム
岩倉市郎	全前
横井照秀	大阪府大阪市住吉区山王町
玉岡松一郎	兵庫県加古川町 応召中 ³⁵
河本正義	神戸市湊区下祇園町
出口米吉	逝去 ³⁶
笹谷良造	奈良県郡山町矢田
岸田定雄	奈良県添上農学校
水木直箭	奈良県郡山町豆腐
織戸健造	
田中和雄	大阪工業通信社内

35 談話会記録をたどってみれば、昭和 12 年 10 月開催の第 30 回民俗談話会で「太田氏玉岡氏へ寄せ書きをなす」(p.15)とあるのに始まり、昭和 13 年 6 月「民俗談話会だより」で「再度召集があり、五月下旬戦地に出発」(14 ウ)、その後「病にたふれた氏は内地帰還」となり(昭和 13 年 11 月「民俗談話会だより」、27 ウ)、翌年「八月下旬に除隊」となる(昭和 14 年 9 月「大阪民俗談話会報」、51 ウ)。玉岡松一郎『戦争体験記』(緑窓文庫、1983)に就いてみれば、「昭和十二年八月四日姫路歩兵三十九連隊に召集」され、同年「十二月二十五日に召集解除」、翌「昭和十三年五月八日再召集」されるも、行軍中、「軍医局の病名になり」「極端な下痢」により野戦病院を転々移動し、病院船で広島第二陸軍病院へ移送。その後、姫路陸軍病院姫路分院、加古川陸軍病院、ふたたび姫路分院に転送され、「昭和十四年八月二十三日に、軍医局の病名にある結核性腹膜炎兼肺炎という半ばにせの病名で、第二款症として除隊となった」という。

36 出口は、昭和 12 (1937) 年 4 月 15 日没。後藤捷一「出口米吉翁年譜(続)」(『近畿民俗』29 号、近畿民俗学会、1962.1、p.26) 参照。

南木芳太郎	大阪府大阪市西成区南吉田町
山口康雄	大阪府大阪市住吉区駒川町
雑賀貞次郎	和歌山県田辺町湊
高田十郎	奈良市西紀寺町東口
青山冬衛	大阪府大阪市旭区新森小路町
中尾新緑	大阪府大阪市住吉区阿倍野筋 横井一美方
和泉国夫	大阪府大阪市南区東清水町茶谷商店
菅原正二	
足立精一	
藪重孝	大阪府三島郡高槻町
洪沢敬三	東京市芝区三田綱町
栗山一夫	兵庫県加西郡下里村
伊藤礫堂	大阪府大阪市南河内郡野田村西野
岩泉千眞伎	大阪府南河内郡野田村西野
高谷重夫	大阪府三島郡高槻町東五百住
平山敏次郎	京都帝国大学国史研究室
玉城実盛	
井野辺天籟	大阪府大阪市天王寺区松ヶ鼻町
西浦伊一	
高落松男	大阪府南河内郡南八下村
片岡長治	奈良県高田町旭町
伊達俊光	大阪府住吉区北田辺町
鈴木太良	東京市芝区慶應義塾中学部
後藤貞夫	大阪府南河内郡富田林高等女学校
志賀勇	大阪府住吉区昭和町
八木清蔭	大阪府南河内郡野田村西野
沢田定司	奈良県北葛城郡五位堂村
後藤捷一	大阪府大阪市東淀川区三国本町

柳田先生	東京市世田谷区成城
与田左門	
橋浦泰雄	東京市杉並区久我山
守随一	東京市目黒区下目黒
小島勝治	布施市西堤
福島公肇	大阪府大阪市西淀川区花川町
奥田喜一郎	大阪府大阪市北区堂島
持田篤文	奈良県南葛城郡忍海村笛吹
土屋充	大阪府大阪市東区寺山町
野々垣勇吉	大阪府大阪市住吉区昭和町東
野々村重三郎	大阪府大阪市西区北堀江通
西谷勝也	兵庫県印南郡米田町
西池憲治	
木村重一	大阪府大阪市西淀川区浦江
芥子久一郎	
森崎国雄	東京国学院大学
礒貝勇	東京芝区三田綱町 アチツクミウゼアム
岡見正雄	京都市右京区川島東代町
山田隆夫	兵庫県西宮市津門大筒町
中西歳盛	大軌花園駅前
木村徳市	大阪毎日学芸部
五明砂	大阪府大阪市東淀川区三国錦通
音代節雄	大阪府北河内郡枚方町
柴田実	京都帝国大学国史研究室
赤司健之	大阪府北区都島中通
橘文策	大阪市天王寺区六万休町
太田陸郎	出征中（兵庫県）

昭和十三年二月十九日／大阪市西成区玉出本通一ノ一二 近畿民俗学会

2 月例会案内

【日時】昭和 13 年 2 月 27 日（日）午後 2 時 【場所】染料会館（大阪市東区唐物町） 【話題】題未定（小島勝治） 【共同話題】家族連合および分家

…………… 1 オモテ

- 家族が如何に総合して居かを見て行くことは意義のあることであると思ひます。親子直系と叔姪との関係はどうであるか。家の結合は何が中心になつてゐるか。例へば飛騨白川では、直系のグループをマツイと言つて居り一般には親子水入らずなどと言つて特殊の感覚が見られます。而してその家族の職分もちやんときまつて居る様で、主人、主婦、子供の位置は家々によつて彼の牢りの座の様なきまりがあつたのであります。それが今日我々の家庭にどれ位残つて居かを見て行く要はあると思ひます。物の秩序が如何に発生して行つたかと言ふことは家族生活の制度の発達の上に特にそのあとが見られる様に思ひます。さうして隠居、或は杓子渡しと言つた様な家譲から、二三男の分家の制度まで見て行くと、日本の家族制度の持つ意義はほゞ明かになるのではないかと思ひます。殊に分家については十石以上の土地を有しなければ許されぬとか、分家を新百姓として村では一段低く取扱はうとした事や、逆に分家のために三年はかゝり物を免じたといふ和泉などの例もあつて、古い制度を見ると之には面白い問題がひそんで居ると思ひます。さういふ殊についてお気付の事御準備下さいませ。

尚小島氏は河内地方についての御研究の事をお話し下さる予定です。

(1 オモテ～ウラ)

37 史料は「民俗談話会二月例会御案内」から始まるが、これに続けて「◎一月例会の概報」「◎学会の近況」が続いていくことから、「民俗談話会二月例会御案内」は項目名と判断し、別途「民俗談話会だより」を史料名として括弧書きで補った。

1 月例会概報

【日時】1月30日 【場所】染料会館 【出席者】小島、杉浦、後藤、山田、宮本、沢田 【話題】物の単位と労働量

…………… 1 ウラ

- 之（例会の談話内容——磯部注）については「談話会記録」として後ほど整理しプリントいたします。（1 ウラ）

学界の近況

近畿民俗、民俗学連続講演会、民間伝承の会、日本民族学会附属研究所、地方誌
状勢、民俗関係の書物

…………… 1 ウラ

民俗談話会だより 1938/昭和13年3月

昭和十三年三月三日 以謄写代筆者／大阪市西成区玉出本通一 近畿民俗学会

3 月例会案内

【日時】昭和13年3月13日（日）午後2時 【場所】染料会館（大阪市東区唐物町） 【話題】わん木地について（山田孝雄）

…………… 3 オモテ

- 木地屋については古く柳田先生のすぐれたる論文があり、又牧野信之助氏の近江東小椋村についての綿密なる考証があり、之がいはゆる山窩とは別の存在である事は解明せられて来た。而して懷徳堂に於ての日本民俗学連続講習会に江崎政忠氏の総合的史的なる御講義があつて、我々も木地屋なる山の渡り者がどういふ生活者であるかはほゞ之を知る事を得たのである。併し、この仲間が現在何処に住し、如何なる生活をして居るかについての実情は尚完全に明かにされて居るとは言ひ難い。その地方々々に於ける木地屋の状態については断片的なる報告が民俗学の雑誌に時折あらはれる位のものであつた。然るに山田氏は最近この山住民に興味を覚えられ、播州奥地より美作因

幡へかけての探訪旅行を屢々試みられてゐる。播州奥地の木地屋は丹波の系統だとの口碑を有し、現にわん木地の制作も行うて居る様であるが、すでに転業せる者多く、且老人も少くなつて、近江東小椋村や会津地方の様な濃厚な伝承を見る事は出来ない。併し、静かにこの部落の人々の言葉に耳をかたむけ目を見はつてみると、鍛冶屋、鋳物師、炭焼と深い関係のあつた事が分り、更に木挽、塗師との関係も思ひあはされ、之等渡り者の姿が全般的に明かにされて来る様に思ふ。

かゝる前提のもとに山田氏は木地屋について語られ様として居られる。まことに傾聴すべきお話である。

この話題を中心に木地屋について如何なる事を採集すべきか、木地屋の資料、及山を中心としてゐる職業階級の生活諸相、民俗事象について大方のお話を伺ひたい。

(3 オモテ〜ウラ)

質問一束

早川孝太郎氏より、伊藤一郎氏より、四宮守正氏より、アチックミュージアム、民間伝承の会

..... 3 ウラ

前回例会概報

【日時】2月27日 【場所】染料会館 【出席者】沢田博士（沢田四郎作）、柴田実、小島勝治、山田隆夫、杉浦瓢、小谷方明、鈴木東一、岸田定雄、山口康雄、宮本常一 【話題】錠前の話（小島勝治）、家族について

..... 4 オモテ

学界消息・書物紹介

大和篠原踊歌（中尾新録）、岩倉市郎、上方（南木芳太郎）、熊狩雑記（金子総平）、安藝三津漁民手記（アチックミュージアム）、橋浦泰雄、近畿民俗

..... 4 ウラ

- 主として民謡の研究に力をそいで居られる中尾新録氏が、「大和篠原踊歌」なる編著を公にされた。大和篠原は吉野郡大塔村の最奥の大字で、山峡の急

傾斜にしがみついた部落である。古く焼畑の風あり。大和中最も古風なる処とせられ、木地師の仲間も居た様である。この村に村上義光のつたへたといふ踊あり。その歌詞を録したのが本書である。その歌詞から見れば近畿一円に分布する雨乞踊の歌と同一系統に属する様であるが、この村では別の目的のもとに踊られてゐた様で、踊の持つ古い意義を探る手がりの一つとはならう。尚ここには伊藤櫟堂氏、井野辺天籟氏も入村せられて居る。(著者は東成区中本第一小学校勤務)

(4 ウラ)

回顧私感

..... 5 ウラ

- 談話会記録は二十六回の家に関するものを除く外 二十一回より三十二回まで整理した。二十六回以後は多分近畿民俗へのせていたゞく様になるかと思ふ。三月一杯に一回から二十回までの分も整理する考であつたが、どうやらこの分では四月末まではかかりさうに思はれる。出来上れば原紙にして百枚はあらうと思ふ。目次をつけ出席者の略歴をつけ、まがりなりにも本の体裁にして見たい。さうして三十三回以後の分は、ずつと近畿民俗へ連載していたゞくつもりで居る。この記録の整理が完成すれば私もホツとする。おもふと、この絵が出来てもう五年である。回をかさねること実に三十三回、講演会一回、講習会二十五回、一般に通知出来なかつた臨時会をまで合算すれば八十回を越えて居よう。実に根気よく集つたものであると思ふ。さうしてその間大きくもならず、又、さして小さくもならず、近頃は若い者ばかりの集りになつて来た位が變つたと言へばかはつたのであらうか。送迎した人も多く、物故した方もある。之から尚何回続いて行く事であらうか、どんなに進展して行く事であらうかと時に思ふことが多い。私の案内状書き、記録の整理はすべて学校の宿直の夜が利用された。夜の二時三時まで原紙をきつた事もある。寒い夜、指の爪の間から血をふいた小供ある。併し私には之がたのしい仕事であつた。今夜も十二時に近い。会の今後の隆盛を祈つて今宵も仕事をおかう。

民俗談話会だより 1938/昭和 13 年 4 月

昭和十三年四月五日 以謄写代筆記／大阪市西成区玉出本通一 近畿民俗学会

4 月例会案内

【日時】昭和 13 年 4 月 17 日（日）午後 2 時 【場所】染料会館会議室（大阪市東区唐物町 1） 【話題】「茅の民俗二三」（岸田定雄）

…………… 6 オモテ

質問一束

早川孝太郎、伊藤一郎、アチックミュージアム

…………… 6 オモテ

3 月例会概報

【日時】3 月 13 日 【場所】染料会館 【出席者】沢田四郎作、山田隆夫、小島勝治、西谷勝也、鈴木東一、橘大策、宮本常一 【話題】わん木地について（山田隆夫）

…………… 6 ウラ

木地屋関係資料

史料としての伝説（柳田国男、史学 4-2）、木地屋土着の一二例（柳田国男、郷土研究 1-5）、信濃下伊那郡大鹿村（郷土研究 2）、丹波北桑田郡中村（旅と伝説 5-10）、山のワタリコ（岩手県、旅と伝説 7-1）、弘化嘉永年度の奥熊野の民俗（旅と伝説 8-2）、渡り者 三（奈良県、岸田定雄調査、旅と伝説 9-2）、会津の木地屋部落（高橋文太郎調査、旅と伝説 11-2）、南会津の民俗（木地屋、旅と伝説 11-3）、播州穴栗郡三方村木地屋（民族と歴史 1-2）、丹波中郡五箇村大成（民族と歴史 3-6）、但馬養父郡西谷村（近畿民俗 1-5）、川上郷高原の伝説（近畿民俗 1-5）、木地屋文書（民俗学 4-5,6）、木地屋のことども（民俗学 4-6）、木地屋の話（折口信夫、日本民俗 3-3）、木地屋の話に沿うて（日本民俗 3-3）、京都北桑田郡中村（旅と伝

説 5-10)、宮座に就て (関啓吾、山村生活調査第二回報告)、愛知県北設楽郡振草村 (民具問答集)、木地屋 (山村生活の研究)、木地屋に就て (江崎政忠講義、日本民俗学講習会にて)

..... 6 ウラ

消息二、三

小林存、伊藤櫟堂、後藤捷一、宮武省三、沢田四郎作、山田隆夫・岸田定雄・小島勝治・鈴木東一・宮本常一・横井照秀、近畿民俗

..... 7 ウラ

新刊紹介

五戸方言集、薩州山川ばい船聞書

..... 8 ウラ

* 現地調査 (山田隆夫、岸田定雄、小島勝治、鈴木東一、宮本常一)

- 山田氏は目下盛に中国山地に向つて採集旅行を続けられて居り、その収穫に見るべきものがらう。岸田氏また大和に動き、小島氏も学的熱情をかきたてゝ極地採集を計画されて居る。鈴木氏は春休 河泉の境を歩き、宮本は近江湖北の村を訪うた。

(8 オモテ)

* その他 (小林存、伊藤櫟堂、後藤捷一)

- 小林存氏 雑誌高志路を編輯するハリキリオールドボーイ小林氏は三月三十日サツソウとして来阪、沢田博士宅に二泊。三十一日夜は沢田博士宅に横井照秀、鈴木東一、宮本常一が三集。民俗放談五時間。愉快なる清夜であつた。小林氏は一日東洋美術展覧会を見、夜半大阪をたつて東上。高山、富山を経て帰へられる由。

(7 ウラ)

- 伊藤櫟堂氏 之も同じくハリキリオールドボーイに属する伊藤居士。近頃民俗学をやゝ遠ざかり「人の噂」に「墨東風流陣」をはる。文芸春秋誌にのせた向島物語、墨水崎人伝につづくもの……。あと六七十回は書きますとは……。キモのつぶれる様なソガマシイ (素晴らしい) 話。向島根岸についての断

簡零墨をまで求められる由。お気附の方は同氏へ御教示なり御紹介を請ふ。
同時に我等は氏の民俗学的な金工史の著作を待望して止まぬ。

(7 ウラ～8 オモテ)

- 後藤捷一氏 故出口米吉氏の著述の整理に目下懸命になつて居られる。もうその完成も遠くないであらう。而してその遺著の公にされる時、古く人類学雑誌によつて民俗学の先驅をされた出口氏の業績の再認識の出来るであらう事が我々には何よりも有難い。

(8 オモテ)

民俗談話会だより 1938/昭和 13 年 5 月

昭和十三年五月十二日 以謄写代筆記／大阪市西成区玉出本通一 近畿民俗学会

5 月例会案内

【日時】昭和 13 年 5 月 22 日（日）午後 2 時 【場所】染料会館会議室（大阪市東区唐物町 1）

..... 9 オモテ

- 話題 此度はやゝ方法をかへておいで下さつた方々に時間の許す限り目下しらべておいでになる事についてお話を請ひ、且疑問とせられる点について述べていたゞき、之を共同の疑問として調査研究する様にして行きたいと考えます。それが方法論的なものであつてもいい、大いに反省し、今後の方法確立にも資したい。

(9 オモテ)

4 月例会概報

【日時】4 月 17 日 【場所】染料会館 【出席者】沢田、平山、高谷、岸田、玉岡、鈴木、児島、宮本 【話題】茅の言語学的な考察（岸田定雄）

..... 10 ウラ

学界消息その他

民俗学講演会（近畿民俗学会・紀州文化研究会）、小島勝治、柳田国男

..... 11 オモテ

新刊二、三

野母半島民俗聞書年中行事（伊藤一郎「祭礼と民俗」6輯）、禁忌習俗語彙、徭役
労働制の崩壊過程（関島久雄、古島敏雄）

..... 11 オモテ

民俗談話会だより 1938/昭和 13 年 6 月

昭和十三年六月十一日印刷 以謄写代筆記／大阪市西成区玉出本通一 近畿民
俗学会

6 月例会案内

【日時】昭和 13 年 6 月 26 日（日）午後 2 時 【場所】染料会館会議室（大阪市
東区唐物町 1） 【話題】血の問題、調味料 主として甘味について、水の手

..... 12 オモテ

- 前回の話合ひによつて今回から質問提出に対してお話を各自から願ふこと
にいたします。

(12 オモテ)

- 調味料の方も面白い問題だと思つて居ます。砂糖の利用の歴史は多くのエピソードがあるのではないでせうか。之について私はあまり多くを知りませんが、東北の土俗に佐々木喜善氏が二人の老人のそこはかとなき恋愛の結びにたしかにバンだつたかを贈つた話をのせて居られたと思ひますが、之は調味料ではないけれどかうした何でもなし話にも、古人の心が見て行ける様に思ひます。

(12 オモテ～ウラ)

5 月例会概報

【日時】5 月 22 日 【場所】染料会館 【出席者】沢田、橘、岸田、西谷、小島、鈴木、杉浦、山田、宮本 【話題】七度および七度半という数に関する習俗（岸田定雄）、木地屋採訪（山田隆夫）

..... 12 ウラ

学界消息その他

水木要太郎、播磨家島漁村調査

..... 12 ウラ

新刊紹介

民俗学（赤松啓介）、飛騨採訪日誌（沢田四郎作）、服装習俗語彙（柳田国男）、豆州内浦漁民史資料（渋沢敬三）、寒風山麓農民日録（吉田三郎）、奥のしおり（船遊亭扇橋）

..... 13 オモテ

雑誌の記事（地方のもの）

ひだびと 6 月号、因伯民談 4 年 5 号、高志路 4 巻 5 号、くらし 5 号

..... 14 オモテ

玉岡松一郎氏出征

..... 14 ウラ

* 応召関係（玉岡松一郎）

- 玉岡松一郎氏／さきに召集をうけ、一度退営となつて学徒としての活動を期待してゐた氏に再度召集があり、五月下旬戦地に出発せられました。氏の健闘を祈ります。

(14 ウラ)

* 現地調査（渋沢敬三・桜田勝徳・岩倉市郎）

- 播磨家島へ漁村調査に赴かれた澁沢先生、桜田、岩倉の諸氏の一行は五月二十六日大阪通過 伊勢へ向はれた。

(13 オモテ)

民俗談話会だより 1938/昭和13年8月

昭和十三年八月二十二日 以謄写代筆記／大阪市西成区玉出本通一 近畿民俗学会

8月例会案内

【日時】昭和13年8月28日(日)午後2時 【場所】染料会館会議室(大阪市東区唐物町1) 【話題】夏季採集報告

..... 17 オモテ

7月例会概報

【日時】7月31日 【場所】染料会館 【出席者】小島、杉浦、鈴木、山口、山田、沢田、岸田、平山、橘、宮本 【話題】一人前以上及以下の者の名称待遇法、甘味の調味料について

..... 17 オモテ

会員消息その他

後藤貞夫、杉浦瓢、岸田定雄、宮本常一、講演会、大島正隆、小谷方明

..... 17 ウラ

新刊紹介その他

歌謡文学(藤田徳太郎)、南伊那農村誌(竹内利美ほか)、文化月報(五十沢二郎編輯の雑誌)、笑の伝統(「文学」、柳田国男)、今後の会の運営について、橘文策の小形子研究、伊藤樂堂の金工史研究

..... 18 ウラ

- 文化月報 之はさきに談話会だよりの五月号に一寸書いておいた。五十沢二郎氏編輯の雑誌であつて新刊雑誌新聞の索引的雑誌。六月末第一号を出し、八月第二号が出た。民俗学とは直接関係ないが、現在如何なることが、如何に問題にされつゝあるかを知るには最も利便であり、世の思想的動向の見えるのが面白い。

(19 オモテ)

* 現地調査（杉浦瓢、岸田定雄、宮本常一）

- 杉浦瓢氏 久しく雌伏してゐられた氏は八月中旬 今度は海を志して香川県男木島への採訪旅行をされた。夜はエビアミにものせてもらつての採集の由で収穫もまた多かつたことと思ふ。男木島は高松の沖にある一小島であるが、瀬戸内海の東部諸島中一番古風なものを今日も尚存してゐる様であり、カネリの風もある。漁業の制度にも興あるものがある。今回の採集は期待される一つである。

（17 ウラ）

- 岸田定雄氏 そのめぐまれたる地位を利用して大和山中地方の計画的採集を着々と実行せられつゝある。殊に「水の手」の調査についてはその成果を待望してやまぬ。この方面については杉浦瓢氏あり、播磨に栗山一夫氏あり、近畿一円に於ける「水の手」の制度の全貌が漸次明かになつて来る様に思へて愉快である。

（17 ウラ～18 オモテ）

- 宮本は八月中旬 郷里へ帰省した。併し何の収穫もなかつた。たゞ途中で広島県大野村で和紙製造について見聞する所があつた。

（18 オモテ）

* その他（小谷方明）

- 小谷方明氏 和泉を中心とした郷土文庫叢書の計画をして居られる。和泉の人々は郷土についてどういふ書物を求めてゐるか、といふ問題を投げかけて、之に添ふて解答の書を出して行かれようとするのである。方法として面白いし、その成功を祈つてやまぬ。よい御意見があつたら同氏へ御報知を仰ぎたい。

（18 オモテ）

民俗談話会だより 1938/昭和13年9月

昭和十三年九月十一日 以謄写代筆記／大阪市西成区玉出本通一 近畿民俗学会

9月例会案内

【日時】昭和13年9月18日(日)午後2時 【場所】染料会館会議室(大阪市東区唐物町1) 【話題】民俗事象二三の例に於ける内外の比較(山田隆夫)

…………… 20 オモテ

8月例会概報

【日時】8月28日 【場所】染料会館 【出席者】小谷、小島、杉浦、山田、沢田、平山、橘、宮本 【話題】香川県男木島(杉浦瓢)、宮座・用水(宮本常一)、ある民家の建て方(小谷方明)

…………… 20 ウラ

会員消息その他

太田陸郎、鈴木東一、平山敏治郎、山田隆夫、沢田四郎作

…………… 20 ウラ

新刊紹介その他

東北の民俗、山の人たち(高橋文太郎)、気候と文明(ハンチントン)、大地(パール・バック)、土(長塚節)、光雲懷古録(高村光雲)、日本その日その日(モース)、ラフカディオ・ハーン、今後の会の運営について

…………… 21 ウラ

* 応召関係(太田陸郎)

- 太田陸郎氏 すでに政戦の途につかれた氏は今 中支の某地に於て活躍中であるが、いよ／＼健在の由。而して氏はその民俗学的触手を以て中支風俗を注視して居られるがその農耕に於ては日本と相通ずる物きはめて多く、アジアは一であるとの説を大陸に渡つて痛感せられてみると。

(20 ウラ～21 オモテ)

* 現地調査（鈴木東一、平山敏治郎、山田隆夫）

- 鈴木東一氏は伊吹山麓方面へ旅行された。短時日で得る所は少かつたとの事であるが今後の同地方への採訪の程が期待される。

(21 オモテ)

- 平山敏治郎氏は越前今立郡岡本村の村誌編纂委員として同村に屢々入村。民俗の採集にも多くの効果をあげて居られる。／尚氏は今秋京都府熊野郡湊村の海村調査を完了せられる予定であり、完了と同時に本会に於て御報告をしていたべく事になつてゐる。

(21 オモテ)

- 山田隆夫氏は全快の水害にもめげずすでに再起。今秋より中国木地屋の民俗採集に没頭さるべく九月下旬出発の予定。その成果を今から期待する。

(21 オモテ)

民俗談話会だより 1938/昭和 13 年 10 月

昭和十三年十月十五日 以 謄写代筆記 大阪市西成区玉出本通一 近畿民俗学会

10 月例会（第 41 回）案内

【日時】昭和 13 年 10 月 23 日（日）午後 2 時 【場所】橘文策宅（大阪市天王寺区六万休町） 【話題】木形子について（橘文策）

..... 23 オモテ

- 橘氏の木形子か木形子の橘氏かといふ程氏の木形子研究に傾倒せられたる処は大きい。而してその業績は今日まで氏御編輯の雑誌によつて、或は新聞によつて公にされた事屢々であつた。然るに談話会は全く談話に偏してかゝる見学及民具などの研究については最も疎かつた。而して氏の業績を知りつゝその教示を仰ぐ折さへもなかつた。幸今回氏の御厚情によつてそのアトリエに木形子を見、且木形子についてうかゞふ事にした。彼の草深い東北の

山間でかゝるあどけない人形の製作せられて来たことは考へて見ると意義が深い。由来おもちやには父祖がその意志を子に継承せしめんとする意図に出たものが多く、そこに民俗学上問題にすべき事が多い。さういふ意味での玩具の研究も本格的に起つて来なければならぬ。今回の行事がさういふ契機ともなれば幸である。

(23 オモテ〜ウラ)

9 月例会概報

【日時】9 月 18 日 【場所】染料会館 【出席者】鈴木、小島、山田、平山、岸田、高谷、後藤貞、橘、沢田、牧田、宮本 【話題】シーダイヤク族の習俗（山田隆夫）、船玉・船おろし（牧田繁）

…………… 23 ウラ

民俗学講習会

【日時】10 月 1 日 【場所】岡島会館 【主催】近畿民俗学会 【演題】体意の示現（倉田一郎）、住吉神社祭神考（山根徳太郎）、村落結合の過程（牧野信之助）

…………… 24 オモテ

学会その他の消息

連続講習会（東京）、民間伝承の会事務局移転、モンドリ研究（アチックミュージアム）、「上方」冠婚葬祭号原稿募集、講習会（新潟）、山田隆夫、西谷勝也、沢田四郎作

…………… 24 ウラ

新刊紹介

一谷戦記（後藤捷一）、山の民（江馬修）、復軒旅日記、越後三面村布部郷土誌（丹田二郎）、宇和島藩吉田藩漁村経済史料、社会経済史料雑纂第一輯

…………… 25 オモテ

- 余白が減つて来たので走書式近頃よんだ書物について報告する。

(25 オモテ)

* 現地調査（山田隆夫、西谷勝也、澤田四郎作）

- 山田隆夫氏は目下木地屋調査のために中部の山間に入つてゐる。氏の熱情は実は実に尊い。木地屋が特異なる種族か、野の人とどれだけ差を有するかも氏に待つて明かとなるであらう。

(25 オモテ)

- 西谷勝也氏の播磨地方のトウの研究も着々進み本夏その一部をある講習会にて講義せられた由。

(25 オモテ)

- 二日続の休で沢田博士は飛騨丹生川に入村その□□^(印刷擦れ)を完成しようとしてゐられる。

(25 オモテ)

* 木形子製作用具調査 橋文策

「宮城県玉造郡鳴子温泉 高橋武蔵」による「昭和十三年七月八日解答」^(ママ)の資料。ガリ版刷り、三枚。二月例会の参考資料として添付か。

..... 挿入資料

民俗談話会だより 1938/昭和 13 年 11 月

昭和十三年十一月十九日 以謄写代筆記／大阪市西成区玉出本通一 近畿民俗学会

11 月例会（第 42 回）案内

【日時】昭和 13 年 11 月 27 日、午後 2 時 【場所】染料会館会議室（大阪市東区唐物町 1） 【輪読】郷土生活の研究法（151p、民俗資料の分類 住居 衣服）

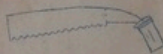
【当番話題】植物と民俗（鈴木東一） 【民間伝承共同課題】「うれしい場合」「かなしい場合」「腹立たしい場合」「楽しい場合」「恐しい場合」「淋しい場合」の形容詞について

..... 26 オモテ

木形子製作用具調査

宮城縣王造郡鳴子海泉高橋武藏

昭和十三年七月八日 解答

昭和十三年七月八日 御答	略圖	質問欄	御解答は出来る、但し詳しく願います
 新品一個の値段 何年位の使用に 耐へますか	名 稱 木割鉋 四五年位 一枚中品五円位	名 稱 新品一個の値段 どの位用ゐるが あります	二円位 木適宜に割る場合 簡便にてタヤ割るに使用
左の品としん片に			

10 月例会概報

【日時】10 月 23 日 【場所】橘文策邸 【出席者】沢田、小谷、杉浦、鈴木、後藤、岸田、青山、栗山、宮本、橘 【話題】木形子の名称（橘文策）、播磨に於ける田地の用水（栗山一夫）

..... 26 ウラ

会雑件

コケシの分布、木地屋の調査、川漁、玉岡松一郎、上方（雑誌）、ドルメン

..... 27 オモテ

* 応召関係（玉岡松一郎）

- 玉岡氏 勇躍出征されて不幸病にたふれた氏は内地帰還となり姫路市の病院に居られたが最近又左記に移られ、すでに甚だ元気を快復せられた由である。一日も早く御全快を祈つて止まない。／兵庫県加古川陸軍病院第二病棟／玉岡松一郎氏

(27 ウラ)

民俗談話会だより 1938/昭和 13 年 12 月

昭和十三年十二月十日 以謄写代筆記／大阪市西成区玉出本通一 近畿民俗学会

12 月例会（第 43 回）案内

【日時】昭和 13 年 12 月 18 日、午後 2 時 【場所】染料会館会議室（大阪市東区唐物町 1） 【輪読】郷土生活の研究法（衣服、pp.162-169）

..... 28 オモテ

11 月例会概報

【日時】11 月 27 日 【場所】染料会館 【出席者】村田祐作（飛騨からの珍客）、山田（因幡木地屋調査帰途）、沢田、平山、高谷、後藤貞、鈴木、宮本 【話題等】

感情をあらわす形容詞（民間伝承共同課題）、郷土生活の研究法輪読、植物の民俗（鈴木東一）、採集談（山田隆夫）

..... 28 ウラ

会消息

岩倉市郎の手紙（越後三面川鮭漁調査）、沢田四郎作、平山敏治郎、小谷方明、織戸健造、山田隆夫、鈴木東一、宮本常一

..... 29 ウラ

出口米吉先生論文索引

..... 31 オモテ

新刊紹介

喜界島農家食事日誌（拵嘉一郎）、社会経済史料雑纂第二輯（アチックミュージアム）、宇和島藩吉田藩漁村経済史料補遺（アチックミュージアム）、上方 12 月号（観光葬祭続編）、中央アジア探検記（スウェン・ヘディン）、奉天三十年（クリスティー）、利根川図誌（柳田国男校訂）

..... 32 オモテ

* 現地調査（岩倉市郎、澤田四郎作、平山敏治郎、小谷方明、織戸健造、山田隆夫、鈴木東一、宮本常一）

- 岩倉氏の手紙／去る十五日より二十三日にかけて越後方面の旅行がありました。伊豆川、楫西、小生は先発して村上町で鮭漁を見学、先生と桜田さんは十九日新潟へ来られ、此处で両隊合して松ヶ鼻 福島潟 新発田 近在 藤塚浜 寺泊 野積の漁業を見学、帰途上越線の川口に一泊 ここでも鮭漁其他川漁に就いて古老の話など聞き、信濃川を遡つて豊野 長野を経て帰郷しました。／村上 三面川の鮭漁は伊豆川浅吉氏が今後専門に調査されるので私共は随行して行つたわけでした。（後略）

(29 ウラ)

- 沢田博士／事変下にあつて、軍医不足から相つぐ召集があり、沢田博士も大体一月中旬頃応召されるのではないかと予想せられてゐる。之を期に旅を慍れつゝ今日まで殆ど満足なる旅も出来なかつた博士は日本全国廻遊を計画

されてゐるが、その序曲として冬休には山田隆夫氏と因、但山中採訪をせられる由。

(30 オモテ〜ウラ)

- 平山敏治郎氏／越前今立郡岡本村の村誌編纂を委嘱されたる氏は屢々同村に出かけて調査を進められてゐるが、同村は紙すきの村であり、この事より紙すきについて各地の資料を求めて居られる。御気付の方は御報告を仰ぎたい。／尚氏は今秋来 飛騨 壱岐などへもよい旅行をされた。

(30 ウラ)

- 小谷方明氏／占有のシルシが木ジルシや石ジルシだけではなく陶器類にもある事に気付き、目下和泉山中の行基焼（祝部土器）の窯跡を発掘調査中であるが續々その資料を得つゝあり、シルシが先年以前に既に存した事実を示さんと意気込んで居られる。

(30 ウラ)

- 織戸健造氏／生活のために民俗学を断念の止むなきに至つた氏から書信あり、その学への熱烈な愛情は未だ去らず、尚日々に追はれて居る旨言つて居られる。

(30 オモテ)

- 山田隆夫氏／少時英気を養つて居られた山田氏は引續いて美濃方面の木地屋調査に向はれる由。

(31 オモテ)

- 鈴木東一氏／紀伊野上地方の採訪を計画してすでに第一回入村をなし、引つゞき冬休を期して調査を進められる由。

(31 オモテ)

- 宮本常一／尚和泉に唯一ヶ所砂糖うりを行つてゐる処があると言ふので、東陶器村まで出かけた。之は七十年前から行はれたもので、現在ではすでに一戸になるまで衰へてゐる。

(31 オモテ)

* 35 欠丁のため刊記不明

昭和 14 年 1 月例会（第 44 回）案内

【日時】昭和 14 年 1 月 22 日、午後 2 時 【場所】染料会館会議室（大阪市東区唐物町） 【行事】冬期各地民俗採集談、郷土生活の研究法——食物（岸田定雄）

..... 33 オモテ

12 月例会概報

【日時】12 月 18 日 【場所】染料会館 【出席者】沢田、橘、平山、鳥越、小島、栗山、岸田、鈴木、山田、後藤、高谷、宮本 【概報】岸田氏、山田氏、『郷土生活の研究法』講読、出席者紹介

..... 33 オモテ

- (4) 新たに参加せられた鳥越憲氏は関西学院大学宗教学教室にある人。同大学の民俗学会幹事として世話にあたつてゐられる。今後引続いて御出席下さる筈であり、暫時地方の学会と連絡のとれて行く事は喜ばしい。

(33 ウラ)

会消息

太田陸郎、澤田四郎作、高谷重夫、山田隆夫、橘文策、後藤貞夫

..... 33 ウラ

* 応召関係（太田陸郎）

- 太田陸郎氏／太田部隊の部隊長として出征せられてゐる。氏は中支に転戦、繁忙なる陣中にあつて、「進駐軍に見た支那習俗」を「旅と伝説」一月号以下に連載せられる事になつた。土と兵隊、麦と兵隊もいい。併しかうした平和な支那の、然も民俗に目をつけられてゐる事は氏なればこそであつて、之がやがて支那建設への途ともなる。

(33 ウラ～34 オモテ)

*** 現地調査（澤田四郎作、山田隆夫、橘文策、後藤貞夫、瀬川清子）**

- 澤田四郎作博士／一月一日より四日まで山田氏の案内にて、高谷氏と三人にて但馬より因幡へのよい旅をせられた。雨と雪の中ではあつたが農家に泊られたり、因幡では蓮仏氏にあつたりして収穫も大であつた。

(34 オモテ)

- 山田隆夫氏／十二月下旬を美濃徳山村に入村。目的の塚部落には雪のためには行けなかつたが相当の効果をおさめられた。／一月一日より四日まで但、因を歩く。但し沢田高谷両氏案内のため前日一度同一コースを下調のため歩いて見たとはこの人でなければできないこと。近頃のケツサクなり。／一月八日上京 渋谷先生をとひ、木曜会に出席、九日夜アチックにて木地屋について語り、更に平山氏と越前今立郡の山間を歩いて、帰西の予定。／渋谷先生のお世話にて民族学附属研究所の高橋文太郎氏と連絡をとり得るに至つたのは氏の喜の一であらうし、又今後の効果も期待せられる。／別に東北に山口弥一郎氏あり。漸次この方面の調査も目ましくなつた。先に柳田先生によつて着目され、その御高説に木地屋なるものの歴史を知り得た我々は、今その一つ一つの部落について実地に研究して見る日を遂に持ち得るに至つた。

(34 オモテ・ウラ)

- 橘文策氏／小形子研究より入つて我等のグループにとつて一先輩である下、いよ／＼熱をあげられ、一月六日大阪をたつて宮城県遠刈田に遠征、同地新地部落二十戸の木地屋について採集。民俗学的にも大いなる効果をあげようとして居られる。

(34 ウラ)

- 後藤貞夫氏／冬休みを豊後に帰省。この冬は民俗採集に力められる由。尚同氏出身の白杵へは今冬、瀬川清子女史がシヤア部落調査に赴かれた。

(34 ウラ)

民俗談話会だより 1939/昭和14年2月

昭和十四年二月十八日 以膳写代筆記／大阪市西成区玉出本通一 大阪民俗談話会

昭和14年2月例会（第45回）案内

【日時】昭和14年2月26日（日）午後2時 【場所】染料会館会議室（大阪市東区唐物町） 【話題】各地民俗採集談、シツケについて、郷土生活の研究法——食物（岸田定雄）

..... 36 オモテ

1月例会概報

【日時】1月22日 【場所】染料会館 【出席者】沢田、山田、鈴木、杉浦、岸田、橘、東山、後藤、宮本 【概報】採訪旅行について、ハレの日の食物・粉食・茶がゆ・食事に伴う禁忌俗信・間食について

..... 36 ウラ

山川氏古鏡見学会

- 泉北郡高石町山川七左衛門氏は土地の素封家として重きをなされ、今日の浜寺高石の繁栄の基を築かれた方であるが、かたわら古鏡蒐集については海内随一を称され、千数百点に及ぶ古鏡の中には、国宝三、重要美術二十五点。民俗研究の我々も是非一見したいものであると、かねて思つて居た処、議と機と熟し、氏の御厚意によつてその見学会を催すを得た。

二月十二日 午後二時より、集る者、伊藤櫟堂、岩泉千真伎、八木清蔭、沢田四郎作、橘文策、青山冬樹、杉浦瓢、栗山一夫、鈴木東一、泉元二郎、後藤貞夫、宮本常一の十二名。岸和田から郷土史家相沢正彦氏が特別参加された。

山川氏邸に陳列せられたる古鏡は、秦代のものより徳川時代まで数百点、所蔵の代表的なるものを網羅され、秋草松喰鶴以下の名鏡を親しく手にとるを得て鑑賞する事の出来たのは又とない感激であつた。而して山川氏は我々の質問に対して一々教示して下され懇切をつくされた。座中、古鏡発掘に多く

の経験を持つ栗山氏あり、金工家としてその道に精通の伊藤氏あり、その技法などにつき詳細なる説明があつた。而して日本が日本として独特なる鑑の発達を持つた事を目のあたり見得た事も愉快なる感激であつた。何故かうなつたかを庶民の側から見て行かうと言ふのが我々の仕事である。一通見學を終つて山川氏から蒐集苦心談を承り、尚愛着をたち得ず更に一回拝見して辞したのであつた。

同日奈良の高田十郎先生、泉北の小谷方明氏、関西学院の鳥越憲氏も参加の予定であつたのが、高田先生は御病気で、小谷鳥越氏等は止むない事情でおいでにならなかつたのは残念であつた。殊に金石文に精しい高田先生の不参は惜しまれてならなかつた。

茲に山川氏に厚く御礼申上げる。

(36 ウラ～37 ウラ)

会消息その他

山田隆夫、高谷重夫、長田神社追儺見学会、伊藤櫟堂、カンジキ調査、モンドリ調査

..... 37 ウラ

新刊紹介

山の民第二部（江馬修）、泉南織布発達史（相沢正彦）

..... 38 ウラ

* 現地調査（山田隆夫、高谷重夫、伊藤櫟堂、高橋文太郎）

- 山田隆夫氏は一月下旬にも亦美濃山中に入られた。高谷氏と共に。高谷氏は主として出作について調査されたやうであり、承りたい話も多いと思ふ。山田氏高谷氏の採集談を承りたいと思つてゐます。

(36 オモテ)

- 山田隆夫氏 高谷重夫氏／一月下旬雪深い美濃の山間に入つて山田氏は木地屋を、高谷氏は出作小屋を調査され、非常な効果をあげて帰阪された。尚山田氏の慫慂によつて同地木地屋の篤志家が、その仕事振、生活、伝承、全般に亘つて非常に詳細なる記録を作りつゝあるとの事である。

(37 ウラ)

- 伊藤欒堂氏／氏の旅行は一種独特の風変りなものであるが、今回又鍬一挺を肩に、百姓姿で、東海道を六十日ばかりかけてゆつくりとテク／＼東京まで下る計画をたてられた。面白い収穫のある事と思はれる。

(38 オモテ)

- 高橋文太郎氏／東京の高橋文太郎氏がカンジキの調査をして居られるので、資料持合はせの方、又はお気付の方は東京氏外保谷村下保谷、日本民族学会附属研究所内同氏宛、又は小生（宮本）に御教示願ひたい。

(38 オモテ)

民俗談話会だより 1939/昭和 14 年 3 月

昭和十四年三月十二日 以膳写代筆記／大阪市西成区玉出本通一 大阪民俗談話会

昭和 14 年 3 月例会（第 46 回）案内

【日時】昭和 14 年 3 月 19 日（日）午後 2 時、【場所】染料会館（大阪市東区唐物町） 【話題】山小屋の生活（橘文策）、資料取得方法（鈴木東一）

..... 39 オモテ

2 月例会概報

【日時】2 月 26 日 【場所】染料会館 【出席者】沢田、橘、杉浦、後藤貞、鈴木、東山、宮本 【概報】各地民俗採集談、橿原神宮神域拡張工事現場で発見される井戸について（高山）、郷土生活の研究法——食物（岸田）

..... 39 ウラ

会消息その他

太田陸郎、山田隆夫、西谷勝也、岸田定雄、沢田博士（沢田四郎作）、鉄筆（宮本常一）

..... 40 オモテ

新刊紹介

歳時習俗語彙（柳田国男）、塩俗問答集（アチックミュージアム編）

..... 40 ウラ

* 応召関係（太田陸郎、岸田定雄）

- 太田陸郎氏／最近消息をよせられて、民俗学関係の人から通信が少いのがさびしいとの事である。どうぞ大いに皆御通信の程を御願申上げる。宛名は／
中支派遣軍 片村部隊 北尾部隊気附／太田陸部隊 太田陸郎氏／である。
(40 オモテ)
- 岸田定雄氏／二月下旬陸軍教育召集をうけ御郷里にかへられてオイチニ／
＼。軍事風景はめでたし。

(40 ウラ)

大阪民俗談話会報 1939/昭和 14 年 5 月

昭和十四年五月二十日 以謄写代筆記／大阪市西成区玉出本通一 大阪民俗談話会

昭和 14 年 5 月例会（第 48 回）案内

【日時】昭和 14 年 5 月 28 日、午後 2 時 【場所】染料会館（大阪市東区唐物町）

【話題】豊後臼杵の民俗（後藤貞夫）、資料取得の方法（鈴木東一）

..... 41 オモテ

3 月例会概報

【日時】3 月 19 日 【場所】染料会館 【出席者】橘、西岡、山田、鈴木、鈴木、
栗山、後藤、宮崎 【概報】橘氏「遠刈田の木地屋の背勝」について

..... 41 ウラ

- 今回は西岡一雄氏鈴木茂が新に出席された。山田氏の御紹介によるものであり、両氏ともすぐれたる登山家であり、西岡氏は柳田先生の著書の愛読者のお一人でもあり、民俗学には理解が深い。

二月下旬 陸軍教育召集 御前重役から
 オーク() 軍事現況はめでたし。

(4) 沢田博士

一月には入部と期待の博士の方へは陸軍から
 何の連絡もない。或は四月であらうかと言つて
 居るが、お上の事は何とも想像出来ぬ。
 平あふん問合せもあるの。ここは右條
 報告中と云ふります。

・さうかく申す 鉄筆氏も流石と口内賢にや
 ら小つ三月初より敵を有様、原紙をきるのも
 骨が折れる。今日は二枚だけ、御免を蒙り買
 からん事をなすことと云ふります。

新刊部介

▲歳時習俗誌 田先生著 一回生天
 いう申すまでもありますまい。流し傳説に巻き
 ぬ。年中行事調査標目を大増補、再整理され
 ぬ。本文索引おはせ七五〇頁。

御希望の方の二二三冊 三月例会に持参します。

▲塩俗問答集 アチワウとウセアム編

全圖約百五十金十冊から解答を求めた塩に關
 する習俗集。各項目によつてまとめたもので、ある
 塩かふんが人生に關係せるのを知るには格別の著
 である。

昭和十四年五月 以時文化雑誌
 大阪市東区玉造一 大阪民俗誌會

大阪民俗誌會報 五月

目次

五月例会報告	四一
豊後臼杵の民俗	四二
三月例会報告	四三
四月例会報告	四四
會消息	四五
豊後臼杵の民俗	四六
三田村一氏	四七
山田隆夫氏	四八
沢田博士	四九
新刊部介	五〇
小野谷道	五一
檀原神宮	五二
応大寺地	五三

・昭和十四年五月(第四十八回)
 例会開催中
 日時 昭和十四年五月二十八日 午後二時より
 場所 大阪市東区唐物町一 染料會館

話題

1 豊後臼杵の民俗 後藤貞夫氏

豊後臼杵は九州の東部、一城下町であるが、その
 とい小漁民の居る地である。我々の仲間では同族は
 つたへてある。だが、後藤氏はこの町の上町とい
 小へき侍の屋敷町の方を成長させ、よき傳承を
 町の節親を述べた。従つて自身は民俗
 學を研究する者といふ。持たれ、その定成
 せる民俗誌の報告書を期待しようとするものか
 四一

4 月例会概報

【日時】4月23日 【出席者】岸田、平山、後藤、鈴木、岩泉、宮本 【概報】
見学会

..... 42 オモテ

- 今回は見学の会にする事にして岸田氏御世話万端にあたり、榎原神宮聖域拡張地帯発掘遺物と郡山の東、稗田環濠垣内の見学を行つた。榎原人物の事務所では末永雅雄氏の特別の御好意と日色四郎氏の御説明で、一々の遺物について委しく拝見する事が出来、二月例会に於て栗山氏の報ぜられた井戸なども目のあたり見て意義深いものがあつた。

稗田では区長松村捨次郎氏のお宅に上り、色々の御饗応にあづかり、且広大寺池の灌漑についてくはしくうかゞへたのは有難いことであつた。折から豪雨となつたが古事記の伝承者である稗田阿礼を祀つた賣田神社に参詣、郡山まで松村氏の見送をいたゞいた。全く感謝の外なく岸田氏の御配慮に対しても厚く御礼申しあげる。尚同地での伝承では阿礼は女であるとしてゐるのは面白いが最近阿礼踊なるものが出来、阿礼をぢいさまにしたことから男と考へるに至つたのは記録し、且公にしておく要がある。何故なら今に至るも阿礼を男子として女子とする説両つながら行はれてゐるからである。

(42 オモテ)

会消息その他

悼沢田博士夫人逝去、高谷重夫、玉岡松一郎、岸田定雄、栗山一夫、山田隆夫、宮本常一、上方百号記念祝賀会、沢田博士

..... 42 ウラ

- 悼沢田博士夫人逝去／夫人は早く博士に嫁し温順貞淑にして博士は学業をその内より助けられ、大阪民俗談話会発達の為には、又少からぬ御世話にあづかつた。博士のお宅に参上したる者にして夫人の御厚情にあづからぬ者も又少かつたであらう。然るに忽如として三月十四日永眠さる。驚愕胸をついたのであつた。こえて十六日誓源寺にて告別式挙行。会員諸氏の多数御参列

あり。世話人一同感謝にたえぬ処であつた。／御葬儀はきはめて盛大。故夫人御生前の徳を偲ぶを得た。

(42 ウラ)

新刊紹介

和泉昔話集（南要）、土佐室戸浮津組捕鯨史料、小野於通、ドルメン

…………… 43 オモテ

- 和泉昔話集 南要著／南氏は本会にも古く出席して居られた篤学青年の学徒。目下和泉にあつて郷土研究に専念し、和泉錦業史のぼう大な著述を完成されたが、傍、勤王史、方言、昔話の研究にも着手。殊に諸誌に散掲されたる和泉関係資料の整理について痛感し、ここに先づ昔話集の編著を公にされた。「十二支の由来」以下五十五の説話を集め、和泉が昔話の宝庫とは言はれざるも曾ては現今日本辺陲の地に行はれてゐる説話の行はれてゐた事がうかゞへて愉快であると共に、之を一書にまとめて我々の便に資せられた同氏の労を謝したい。／発行所 大阪府和泉北郡泉町一條院同氏方 非売品

(43 ウラ～44 オモテ)

橿原神宮聖域拡張工事発掘遺跡についての講演要領（日色四郎）

縄文土器出土地、弥生式土器、住居址、井戸

…………… 44 ウラ

廣大寺池の灌漑（松村捨次郎）

三百間人足、川ザラエ、地守、水番、三一三夜、わたし水、井戸番、濠の水、ワリミズ、太子まいり、雨よろこび、郷算用

…………… 45 オモテ

*その他（高谷重夫、栗山一夫、山田隆夫）

- 高谷重夫氏／今回大阪府泉北郡府立鳳中学校教諭に任ぜられ同校の歴史を担当せられることになった。

(42 ウラ)

- 栗山一夫氏 山田隆夫氏／四月から関西学院大学宗教学教室に聴講生として入学、ヒルバーン教授の指導を受けてゐられる。／両氏とも意気軒昂、法文

学部に民俗学講座をも樹立せん意気にて活動、最近は商経学部の柚木重三教授とも近づき、同学内の斯学を活気あらしめんとしてゐる。柚木教授はその経済史に民俗学を取入れんとしつつある方にて、今後我々も御指導を仰ぐ事が多いかと考へられ愉快的次第である。

(43 オモテ)

- 上方百号記念祝賀会／五月十四日三越に於て南木氏の上方百号刊行の祝賀会が催された。南木氏の上方誌を通じての上方文化宣揚の運動は実に熾烈な犠牲的なものであり、又早く我々との提携をも計画され、最近は冠婚葬祭の特輯号なども出された。今後、我々も大いに上方誌を支持すると共に都市民俗研究のために、南木氏の御教示をも仰ぐやうな機会を作りたいと思つてゐる。／尚同夜の祝宴はきはめて盛大であつた。

(43 オモテ～ウラ)

大阪民俗談話会報 1939/昭和14年7月

昭和十四年七月九日 以謄写代筆記／大阪市西成区玉出本通一 大阪民俗談話会

昭和14年7月例会（第49回）案内

【日時】昭和14年7月16日、午後2時 【場所】染料会館（大阪市東区唐物町）

【話題】兵庫県下の頭行事（高谷重夫）

..... 47 オモテ

5月例会概報

【日時】5月28日 【場所】染料会館 【出席者】橘、小谷、岸田、鈴木、西谷、沢田、高谷、鳥越、山田、後藤、栗山、宮本 【概報】豊後臼杵の民俗（後藤貞夫）、資料取得の方法（鈴木東一）

..... 47 オモテ

- 鈴木氏によつて「郷土生活の研究法」をよみ、資料取得の方法について話した。／所有権の問題、薪山の慣習についての諸例があげられ、きはめて興深きものあり、殊に後者は今後大いに手を入れて見るべきものではないかと思つた。

(48 オモテ)

沢田先生応召送別会

- 六月二十日 沢田先生は軍医として応召される事となり、一同まことに驚愕した。併し国家のためであり、先生もきはめて意気盛で勇躍 「大阪市東区法門坂町 奥津部隊 金田隊第二班」に入隊せられた。

応召と承るや、高谷、鈴木、杉浦、宮本の四名会合し、送別会の事を計画し、沢田先生の御承諾を得て、六月十七日午後六時北極星にて送別の宴を催し、先生の御入隊を祝した。

当日来会を賜はりし方々

笹谷良造、後藤貞夫、平山敏治郎、赤司健之、水木直箭、高谷重夫、小島勝治、岸田定雄、鈴木東一、宮本常一、小谷方明、伊藤櫟堂、横井照秀、山口康雄、山田孝雄、持田篤文の諸氏

尚、送別記念品代を御送り下されたる方々

藪重孝、橘文策、後藤捷一、岩泉千真伎の諸氏であつた。

尚入隊当日は、山田、鈴木、宮本の三名が会からとして御見送り申し、又赤司氏も見送られた。

(48 オモテ～ウラ)

奈良民俗学講演会

【日時】6月24日(土)午後4時 【場所】奈良図書館階上 【話題】民俗採集説(岸田定雄)、民俗学の現状及将来(笹谷良造)、野神さんの話(野村伝四)

…………… 48 ウラ

- 民俗学の地方講演会は神戸、和歌山、大阪、奈良と之で四回目であるが、今回は講演会ずれがして、出席者のきはめて少いといはれる地においての海佐であつたにかゝはらず、来会者約七十名、仲々の盛会であつたのは喜ばしい

事であつた。尚、大阪民俗談話会六月例会は中止してこの会へ御来会をお願い申した処多数おいで願へたのはこの上ない有難いことであつた。

(48 ウラ)

会消息その他

沢田博士（沢田四郎作）、橘文策、小島勝治、杉浦瓢、山田、後藤貞夫、宮本常一、関西学院大学民俗学講演会

..... 49 オモテ

- 橘文策氏／永年の御研究について一著をまとめられ名づけて「こけしと作者」といふ。「木形子談叢」以後四年間に亙る諸文を大改訂して一札とせられたものであり、こけしを知らんとするもの、新に蒐集するもの、愛蔵家、研究家のために役立ちたい意図のもとに成つたものである。愛蔵版と普及版あり、愛蔵版三円五十銭、普及版二円。諸氏の御愛読をお願いいたします。

(49 オモテ)

- 杉浦瓢氏／最近古本の売買などの商売をせられるやうになつた。入用の書、或御不用の書は同氏に御依頼下さらば、お互に仕合せかと考へます。

(49 オモテ～ウラ)

新刊書目

木綿以前の事（柳田国男）、耳袋上下（柳田国男校訂）、カレワラ（森本覚丹訳）、サイキス・タスク（フレイザア）、日本美の再発見（ブルーノ・タウト）、農と稗（早川孝太郎）、稗と民俗（早川孝太郎）、稗の未来（柳田国男）、居住習俗語彙（柳田国男）

..... 49 ウラ

* 応召関係（澤田四郎作）

- 沢田博士／沢田博士は故夫人の追悼文集手向草を編まれ、百ヶ日忌に之を大方に贈られんとしたその日、御入隊することになられた。まことに奇しきめぐりあはせであつた。（中略）近く衛生伍長に進級される。

(49 オモテ)

*** 現地調査（山田隆夫・後藤貞夫・宮本常一）**

- 山田、後藤貞、宮本／奈良の会の後で三人して九体寺へまわり、寺の前なる旧無足人沖氏の家に一泊 同家の八十五になる栄治郎翁から維新前後の事情、年中行事などについてきいた。伝承型のまことにより老人であつた。

(49 ウラ)

大阪民俗談話会報 1939/昭和 14 年 9 月

昭和 14 年 9 月例会（第 50 回）案内

【日時】昭和 14 年 9 月 24 日（日）午後 2 時 【集合場所】大軌電車郡山駅前

【行事】水木直箭宅訪問

…………… 50 オモテ

- かねてから念願してみた柳田先生の学的業績についての拝見をするために、郡山町豆腐なる水木直箭先生お宅を、会員一同で訪問する計画をたてました。水木先生が柳田先生に私淑されて、その論文を蒐集され、又すぐれたる柳田先生著作目録を公にされて居ますのは御承知の通であります。又水木先生は折口博士のものもずみぶん集めて居られ、茲に日本民俗学の発達をうかゞひ、且亮先生の業績を回顧するにはまことによい機会であり、両先生を語るに最もふさはしい方も亦水木先生でありますので大方の御参加をお待ち申します。

尚水木先生の御尊父故十五堂先生は曾て女高師教授として、亦書家^(ママ)とし、令名高かりし人、殊に先生の日常茶飯事に至るまでを筆録せる所謂大福帳なるものは屢々新聞紙上にも見えて名高きもの冊数も三百を超えてみると申します。

見て得る所大なるものありとも存じ、その拝見万をもお願いしたいと思つてみます。

(50 オモテ～ウラ)

7 月例会概報

【日時】7 月 16 日 【場所】染料会館 【出席者】沢田、橘、鈴木、高谷、後藤貞、栗山、杉浦、小島、山田、宮本 【概報】兵庫県下の頭行事（高谷重夫）、美濃の出作小屋（山田孝雄）

..... 50 ウラ

会消息その他

沢田博士（沢田四郎作）、橘文策、太田陸郎、岸田定雄、玉岡松一郎、岩倉市郎、伊藤櫟堂、山田孝雄、高谷重夫、鈴木東一、後藤貞夫、栗山一夫、杉浦瓢、桜田勝徳、宮本常一

..... 51 オモテ

柳田先生

- 九月十四日東京をたゝれて、山口、松山両高校に講演旅行をせられる事になったが、今回は大阪へはお寄になられず、まことに残念である。御予定は京都より山陰に出で、島根民俗の大会に講演、山口にて御講義、門司に於ける民俗大会に出席、御講演、松山にて御講義、それより徳島和歌山を経て熊野に出で御帰郷の由。せめて一日でも大阪お立寄をと思つたが右の次第にて御願ひ出来なかつた。

(52 ウラ)

新刊書目

古代社会（岡田謙）、南洋文学（宮武正道）、信濃昔話集、和泉民具図譜（小谷方明）、佐渡昔話集（鈴木棠三）、星家種子帳稻刈帳（金子総平編）、片山家日常襍記抄（江戸時代下級武家生活を知るよき書）、喜界島代官記、朝鮮多島海旅行覚書、稗と稲（藤原相之助）、稗の精白（小原哲二郎）、飛驒と稗飯（江馬三枝子）、稗食の栄養について（小泉親彦）

..... 52 ウラ

* 応召関係（澤田四郎作、橘文策、太田陸郎、岸田定雄、玉岡松一郎）

- 沢田博士／七十五日間の軍隊生活ををへられて九月三日午前沢田博士は無事除隊された。（中略）四日夜より博士の念願なりし旅行に出られ、松本、

長野、上田、小諸等を経て東京に出で、知友を歴訪、十日の柳田先生お宅の談話会にも出席、帰阪された。

(51 オモテ)

- 橘文策氏／八月三日氏の労作「こけしと作者」の出版記念祝賀会あり（エビス橋三笠屋にて） 五日午前十時四十五分の列車にて、満州国通信社に入社せられるため、出発された。

(51 オモテ)

- 太田陸郎氏／氏所属なりし北尾隊の隊長帰還のため桧垣舞台所属に変更、ひきつゞき中支に御活動されてゐる。新宛名は／中支派遣軍片村部隊桧垣部隊 太田隊 太田陸郎氏

(51 オモテ)

- 岸田定雄氏／八月二十八日応召、三十一日には早くも戦地へたゝれた。壮行の会を催す間さへなかつたのを残念に思つてゐる。

(51 オモテ)

- 玉岡松一郎氏／皇軍の勇士として出征、各地に転戦して活躍中 不幸病を得て帰還、久しく陸軍病院にて療養中なりし 氏は八月末前回され無事除隊された。

(51 ウラ)

*** 現地調査（岩倉市郎、伊藤櫟堂、山田隆夫、高谷重夫、鈴木東一、後藤貞夫、栗山一夫、桜田勝徳、宮本常一）**

- 岩倉市郎氏／（中略）八月中旬西美濃の木地屋調査のために採訪中病を得られて目下療養中。

(51 ウラ)

- 伊藤櫟堂氏／今夏は飛騨境の奥美濃にて俗世と絶ちて洞窟生活をなし、大いに得る所あつて帰阪されたる由

(51 ウラ)

- 山田隆夫氏／七月下旬美濃坂内に入村、ついで大和十津川採訪、八月初旬再び坂内に入村、それより状況。中旬三度坂内に入村、木地作業につきアチツ

クの桜田氏、岩倉氏、大阪の高谷氏、鈴木氏等と調査し、得る所大なるものがあつた由。

(51 ウラ)

- 高谷重夫氏／山田氏と美濃十津川の行を共にし、八月初旬には隠岐に渡島、ついで中旬の美濃奥調査に参加。それより越前に越えて帰阪された。

(51 ウラ～52 オモテ)

- 鈴木東一氏／美濃坂内の木地屋調査一行に加はり近江へ出て帰阪。

(52 オモテ)

- 後藤貞夫氏／七月下旬帰郷せられ、郷里の民俗調査をせられた。

(52 オモテ)

- 栗山一夫氏／七月末、山城より近江へかけて歩き、農耕習俗調査に効果をあげられた由。

(52 オモテ)

- 桜田勝徳氏／八月中旬岩倉山田諸氏と美濃に入村　ここは曾てすでに入村したる地として感慨を新にせられたる由。尚九月下旬は岩手県の海岸地方調査の由

(52 オモテ)

- 宮本常一／八月初旬隠岐にわたりそれより帰郷、中国一帯の饑饉甚しきを見て気の毒にたへず調査する気になれず。八月下旬大和吉野郡大塔村に入村。

(52 オモテ～ウラ)

*その他（杉浦瓢）

- 杉浦瓢氏／いよ／＼古本屋として出発した氏は独自なる方法で古本蒐集に力をそゝいでられる。併し未だ店舗をはるまでになつてゐないので大方の御支援を仰ぎたい。古本を通じて見た世相は、「こんなくだらぬものが」と思はれるやうな古雑誌が一番よく売れる由。然も実によく売れる。飛ぶ如く……。よい本は仲々うれません——とは残念。

(52 オモテ)

昭和十四年十二月六日 以謄写代筆記／大阪市西成区玉出本通一 大阪民俗談話会

第 53 回例会案内

【日時】昭和 14 年 12 月 10 日（日）午後 1 時 【場所】染料会館（大阪市東区唐物町） 【話題】労働

…………… 1 オモテ

- 前例会に引続いてもう一度労働について話合ふことにしました。これは、他と切り離して孤立的に取扱ふことも面白くなく、生活と密接であつたならばそれだけ尚更に生活の各部面と深い交渉があつて、それだけ又問題は多岐にわたるかも知れませんが出来るだけ視野を広めておく必要があるのではないかと考へられますので 勢々皆様の御準備を期待致^(虫喰)す。

(1 オモテ)

9 月例会概報

【日時】9 月 24 日 【場所】水木先生宅にて

…………… 1 オモテ

- 柳田先生著作目録が如何にして公にされたものか、実は、甚だ安易な気持ちで見てみたものでしたが 水木先生のお宅に参つて始めてその努力の容易ならんことを覚りました。あの著作目録に感心させられてはみましたが、それを実にする機会を得ましたことは会員ともに感謝に堪へません。

出席者

水木直箭 笹谷良造 藤枝正路 澤田四郎作 平山敏治郎 宮本常一 鳥越憲 杉浦瓢 鈴木東一 高谷重夫 山田隆夫 後藤貞夫 栗山一夫

（鉄筆人責任外でありましたので出席者芳名を失念してゐるかも知れません）おゆるし下さい

(1 オモテ)

10 月例会概報

【日時】10月17日 【場所】染料会館 【出席者】小島勝治、杉浦瓢、平山敏治郎、高谷重夫、水木直箭、小谷方明、後藤貞夫、宮本常一、鈴木東一 【話題】
十津川採集談（宮本常一）

…………… 1 ウラ

- 大和は民俗学の宝庫である掘出せばいくらでもある。しかし、今の中に採集しておかねばならない。と入るべき経路、訪ぬべき人々について語られた。

(1 ウラ)

宮本常一送別会（戒橋天琴楼）

【出席者】岩泉 伊藤 南木 佐藤 小島 杉浦 高谷 山田 澤田 平山 後藤貞 西谷 栗山 小谷 水木 柴田 笹谷 鈴木

…………… 1 ウラ

- 永年の教壇生活から学問的に一本の途をたどられやうとする。それがよし栄転といふものでなくて浪人したといつても、本当に晴々とした浪人のしぶりであり、皆、その壮行を喜ばないものはない。それは単に君一個人の為の慶びでなく、学界の慶びであり、この人を大阪から中央へ押立てることは、我我としても肩身広く感^(虫損)る次第である。

しかし、なんと言つても宮本氏は我々グループの中心的存在であつた。今更同氏を失ふことは大きな痛手に違ひない。大阪民俗談話会から近畿民俗学会へと発展していつて、一方中央の民間伝承の会と結びついて益々強固なものに仕上げて来た人と云へば、それを宮本氏としても不当の言であるまいと思ふ。勿論協力した人々のあつたことはもとよりのことではあるが。そして若しこの会が尚盛んになつていくならばその功も亦負ふべきであらうと考へるのです

願はくば宮本氏の将来を期待してやみません。

(1 ウラ～2 オモテ)

11 月例会概報

【日時】11月23日 【場所】染料会館 【出席者】澤田四郎作、山田隆夫、平山敏治郎、高谷重夫、後藤貞夫、鈴木東一、白井久吉 【話題】労働

…………… 2 オモテ

- 労働に於る一人前を決める方法について、これは全国的に知りたいことであり、厚生省あたりの体力検査もこんな方に着目あってよいのでなからうか。しかしこれは労働量が大体標準になつてゐるやうで、田植、縄なひ、ゾウリ作り、炭焼のやうな公準の定められ易いものが選ばれてゐるやうである。(中略) 兎に角一人前を定めることは躰に關係してくる(平山氏)と、この方へも聞き入つていきたい気もする大事な問題だと感じました。

(2 オモテ～ウラ)

消息一、二

関西学院大学民俗学展覧会、宮本常一

…………… 2 ウラ

* 現地調査 (宮本常一)

- 宮本常一氏／島根半島は晴れて三日歩くのには絶好 一年中行事で面白いとききました。

(2 ウラ)

「民間伝承の会」大阪支部会報(二) 1936/昭和11年6月

発行所 大阪市西成区玉出本通一丁目十二 沢田四郎作方「民間伝承の会」大阪支部／編輯人発行人 大阪市住吉区山王町四丁目三十五 横井照秀／昭和十一年六月二十五日印刷

見返し

会告

北畠山、臣山、篠山の山の意味らいて山田氏の御意が

ありました。アサコ郡ヤナセでは、市が立つてはまずと

休んでいくのをママといふ。
まうとこいふのは市の立つたが

仕事をしてゐる。オヤヤ(女郎)モウヤヤ。

スとの
同し意か。

唯尾村唯庵の傳報者(山田氏)云。

美津井製菓所は門入の店とひと一段三千七百圓の

卷之八

「いふは不_レた_レ。さ_レは_レ日_レを_レ思_レひ_レ。身_レに_レて_レは_レお_レか_レ。

八

不都合致しました。お許し下さい。）

● 消息 一

展圖書院大學民俗學展覽會

同学院創立五十週年記念展にこの企てのありましたこと

國合の國に大なるなきを以ての証

た同の現象としてそれを

二 振替会に

上巻の三本を要する要の三本を要する

1877

1945

卷之三

出づるは、
るが、
なり、
り、
用、
二

中
山
の
大
事
に
さ
れ
た
り。
(合
伴)

同様のものは、金座の蔵にあり、その多くは、
金座の蔵にあり、その多くは、

な斐々たる話も、しました。

大隈重信正王正通一 大隈氏恒輝諸公子

10

以昭信時令

This image shows a blank, aged, cream-colored page, likely an endpaper or flyleaf of a book. The paper has a slightly textured appearance with some minor discoloration and a vertical crease down the center, suggesting it was once folded. There is no text or other markings on the page.

...

Downloaded from <http://ajph.org/> on November 10, 2015

- 一 本報告書は八拾五部より刷りませんでしたから、後日申込みあつても残部はありませんから御承知置き願ひます
- 一 会員の採集便宜を図る為に採取手帖を発行したいと思つて居ります
宮座採集手帖 葬制採集手帖
婚姻採集手帖
- 一 談話者の報告概要を記述致し度いと思ひますから、巻単位、毎月二拾日迄に編輯者まで御報告願ひます
- 一 会員中、本書に記載して欲しい事があれば、支部宛、御申出下さい

刊記

- 昭和拾壹年六月発行／「民間伝承の会」大阪支部会報 第三号／「民間伝承の会」大阪支部

..... 表紙

第 21 回例会報告

【日時】昭和 11 年 6 月 14 日、午後 1 時 【場所】染料会館 2 階（大阪市東区唐物町） 【会費】無料 【出席者】水木直箭、西谷勝也、西池憲二、木村重一、横井照秀、鈴木東一、平山敏次郎、沢田四郎作、持田篤文、小島勝治、芥子久一郎、杉浦瓢、山口康雄、織戸健造 【話題】奈良県吉野郡野迫川村の若者に就いて（横井照秀） 【話題概略】若者の性質、若者の行事（小供組、若者組、小供組の行事）、若者入り（ゲンブク）、若者の組織、若者の仕事、オコナヒ（弓手原の行事）、娘の仮親（親替）式 【共同話題】惣代（氏子）について 持田篤文 大和南葛城郡笛吹、西谷勝也 播州印南郡米田町、児島勝治 大阪市街布施町附近、横井照秀 野迫川村弓手原

..... 1 オモテ

第二回民俗学講習会

..... 3 オモテ

会員消息

桜田勝徳、沢田四郎作、宮本常一、伊藤櫟堂、岸田定雄、杉浦瓢、横井照秀

..... 3 オモテ

読書往来

村里生活記（結城哀草果）、津軽の野づち（深田久弥）

..... 3 ウラ

第 22 回大阪民俗談話会通知

【日時】昭和 11 年 7 月 12 日（日）午後 1 時 【場所】染料会館（大阪市東区唐物町） 【会費】無料 【談話】棉作の話（小島勝治）、農耕の水について（杉浦瓢） 【共同話題】農耕に関する事

..... 4 オモテ

御願ひ

..... 4 オモテ

本部へ希望

..... 4 ウラ

地方の研究団体への希望

..... 4 ウラ

- 大阪支部会報をお送り致し度いと思ひますので其代表者の住所 氏名 支部迄御通知願ひます パンフレット御発行の説は御寄送して下さい／大阪支部所在地 大阪市西成区玉出本通一丁目 沢田四郎作氏方

(4 ウラ)

編輯子のことば

..... 4 ウラ

* 現地調査（桜田勝徳、澤田四郎作、伊藤櫟堂、杉浦瓢、横井照秀）

- 桜田勝徳氏／四月中旬 土佐乃海岸及南予の島嶼を巡り鋭い採集術をもつて幾多の有益なる参考資料をノートして帰宅された。
- 澤田四郎作先生／南河 唐久谷へ入村せられる事八回に及び先生独特の採集技能をふるつて益々実績をあげて居られる 何れは南河内民俗誌を出版される由。

(3 オモテ)

(3 オモテ)

- 伊藤樂堂氏／飛騨から信州へかけて約一ヶ月余採集して帰郷された、氏の採集は細々の処まで行届いて居り なかなか熱力^(てつりき)な方で我々のよき先生である 今度再度同地を採集される由である。

(3 ウラ)

- 杉浦瓢氏／最近大和南部の村落を調査してられた。

(3 ウラ)

- 横井照秀氏／大兵肥満の体を物ともせず、山村へ度々行つて居られる 目下大和高市郡新沢村の民俗資料採集に没頭して居られる。

(3 ウラ)

「民間伝承の会」大阪支部会報 (三) 1936/昭和 11 年 8 月

発行所 大阪市西成区玉出本通一丁目十二 沢田四郎作方「民俗伝承の会」大阪支部／編輯人発行人 大阪市住吉区山王町四丁目三十五 横井照秀／昭和十一年八月二十九日印刷発行

見返し

第 23 回大阪支部会案内【日時】昭和 11 年 9 月 5 日 (土) 午後 6 時 【場所】染料会館 (於大阪市東区唐物町) 【会費】金 15 銭、茶菓子あり 【話題】「東京の講習会」について (宮本常一、岸田定雄、横井照秀) 【共同話題】大阪で開かれる長期講習会の件

刊記

- 昭和拾一年八月発行／「民間伝承の会」大阪支部会報 第参号／大阪支部発行

..... 表紙

第 22 回例会報告

【日時】昭和 11 年 7 月 12 日 (日) 午後 1 時 【場所】染料会館 2 階 (大阪市東区唐物町) 【会費】無料 【出席者】小島勝治、横井照秀、高谷重夫、水木直

箭、森崎国雄、藪重孝、杉浦瓢、宮本常一、沢田四郎作、後藤捷一、太田陸郎、持田篤文、岸田定雄、鈴木東一、土屋充、桜田勝徳 【話題】 棉作りの話（小島勝治）、農耕の用水について（杉浦瓢）、泉北郡上神谷村豊田地方の農耕用池（小谷方明）、南葛城郡笛吹き谷の水の分配について（持田篤文）、南河、千代田村の池について（宮本常一）、崔田村の池について（宮本常一）、南河、高向村滝畑の話（宮本常一）

..... p.1

会員動静

後藤貞夫、宮本常一、岸田貞夫、児島勝治、芥子久一郎、杉浦瓢、桜田勝徳

..... p.7

大阪支部会員芳名録（民間伝承の会入会者）八月二十日現在³⁸

..... p.7

（一）

大阪府南河内郡野田村西野	伊藤礫堂
〃	岩泉弥橘
大阪府豊能郡箕面村桜井	飯島正
大阪市北区堂島	奥田悦一郎
大阪府中河内郡弥刀村小若江	大橋富枝
堺市車ノ町西一丁	織戸健造
堺市幸地町東一丁	亀井勝次郎
大阪市東淀川区三口町	岸田定雄
大阪市西成区玉出本通	沢田四郎作

大阪に於ける民俗学講習会

..... p.8

38 これも「出席者芳名」とおなじく住所の掲出を市町村名までとし、番地記載の場合は省略してある。

- 此度原田積善堂の援助に依つて民俗学講習会が当地で開かれる事に成つた
何しろ本邦に於ける最初の民俗講習会丈にその反響も多い事だろう 盛会
を祈つて止まない

一、期日 昭和十一年九月～十二年三月

一、主催 近畿民俗学会

一、会場 大阪市東区内本町懷徳堂

一、講師 柳田先生を初め 東京、京都、大阪、神戸等の諸氏 詳細未定
講習会の正式発表は委員からされますのでこゝではほんの簡単に報告した
丈です

ことわり

..... p.8

書籍紹介

周防大島を中心としたる 海の生活誌（宮本常一）

..... p.9

本部の動静

柳田先生、鈴木棠三、関敬吾

..... p.9

第二回民俗学講習会

..... p.9

新刊紹介

山の神とおこぜ（柳田国男）、昔話採集手帖（柳田国男）、五人組制度の実証的研
究（田村浩）、野辺地方言集（中市謙三）

..... p.9

新参加紹介（9）

- 森崎国男 国学院大学在学中／同君は水木直箭氏の薫陶を受け新進の民俗
学徒で講習会の時淡路の話をされてゐた。

(p.9)

あとがき

..... p.10

絶版書報告

雪国の春（柳田国男）、祭礼と世間（柳田国男）、郷土誌論（柳田国男）、日本の民家（今和次郎）、日本民家史（藤田元春）

..... p.10

* 現地調査（宮本常一、小島勝治、芥子久一郎、鈴木棠三、関啓吾）

- 宮本常一氏／南河滝畑を中心に民俗資料を採集して居られる。
(p.7)
- 小島勝治／職人を熱心に調査し、最近は芥子氏と共に奈良県吉野郡四郷村へ民俗採集に行かれた。渡り者の話を重に聞いて帰られた由。
(p.7)
- 芥子久一郎氏／八月上旬大和吉野の山村へ小島氏と共に^(ママ)行から重に民具を熱心に採録された。
(p.7)
- 鈴木棠三氏 最近に飛騨から若狭へ昔話採集に出られる由。
(p.9)
- 関啓吾氏 近日中に志摩へ昔話の採集に出て行かれる。
(p.9)